

令和7年度

農業改良普及活動実績集

(第55号)



令和8年3月

北アルプス農業農村支援センター

表紙：「令和7年度第6回北アルプスりんごセミナー」

北アルプス地域でりんご栽培を計画している方を対象としたセミナーを全7回開催しました。写真は、りんご普通樹の定植1年目や10年目、わい性台木の整枝せん定講座の様子です。(参加者：セミナー受講生、JA大北、支援センター)

令和8年1月16日 撮影

はじめに

長野県「第4期長野県食と農業農村振興計画（以下「第4期食農計画）」がスタートし、令和9年度までの5年間の県農政の指針となるこの計画において、北アルプス地域は、「北アルプス農業を支える担い手の確保・育成」や「マーケットニーズの高い園芸作物の産地づくり」など6つの取組を重点項目に掲げています。

北アルプス管内の基幹的農業従事者は、2010年から2020年までの10年間で44%も減少し、平均年齢は71.4歳で農業者の減少と高齢化が加速しており、担い手の確保・育成は喫緊の課題です。

また、管内の農業生産については、きのこを除く農業産出額の6割を占めるのが水稻です。

令和7年産米は、作況単収指数は「102」（中信）だったものの、全国のうるち玄米の一等米比率は75.5%と高温や病害虫被害に苦しむ産地が多かった中、当管内は93.6%（長野県93.5%）と県内有数の米産地として、農業者の技術力と関係機関の連携協力により高い品質が維持されています。

一方で、夏から秋にかけての高温や病害虫による品質低下・減収が全国的に大きな課題となっており、当地域でも今後影響が大きくなることが想定されます。

また、生産資材の高騰も続いていることから、今後、産地として維持・発展していくため収益性を高めるには、主力の水稻と高収益作物の組み合わせが必要と考えています。

このような状況を踏まえ、当センターでは第4期食農計画の達成を目指し、令和7年度から重点活動課題に、果樹の担い手確保・育成を目的とした「北アルプス地域の果樹産地維持に向けた担い手の確保・育成」を計画し取組を開始しました。初年目の今年度は、里親研修生や新規就農者等11名を対象とした「りんごセミナー」を7回開催したほか、就農に向けた計画作成や農地の確保、補助事業の利用等について支援を行ってきました。また、里親制度の受け皿確保のため、里親農家への登録を進め、今年度新たに6名の方が里親登録されました。

さらに、重点活動課題に併せて16の一般活動課題に鋭意に取り組んだほか、大規模水稻経営体をターゲットとした「子実用とうもろこし後作大豆栽培の検証」、北部地域の「振興作物の調査・検討」の2つの調査研究課題についても取り組んでまいりました。

また、令和6年の夏から始まったいわゆる「令和の米騒動」対し、農林水産省の対応が大きく変化する中で、大北地区農業振興推進協議会と協力し、農家や関係機関への情報提供、今後のコメ作りを的確に行い稲作経営を持続できるように、元農林水産事務次官などの専門家を招いた「農政セミナー」を3回実施し、対応してまいりました。

この「普及活動実績集」は、こうした当センターの1年間の活動をまとめたものです。

当初目標に達し技術定着等につながったもの、一定の成果が確認され継続した活動により更なる成果が期待できるもの、今後の展開の足掛かりを得るに留まったものなど、その成果水準は一様ではありませんが、普及指導活動の実状をご覧いただくことで、今後の地域振興の参考となれば幸いです。

最後に、当センターの活動に対しご協力いただきました農業者や関係機関・団体の皆様により感謝申し上げますとともに、北アルプス地域の農業・農村の発展に向け、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年3月31日

北アルプス農業農村支援センター所長 菅澤 勉

〈グラビア〉 令和7年度普及活動の軌跡（重点活動）



りんご整枝せん定講習会（大町市）



BCP（事業継続計画）作成支援（大町市）



仕上げ摘花講習会（大町市）



りんごセミナー（松川村）



中生種の適期収穫講習会（大町市）



りんご高密植予定園土壌調査（大町市）

〈グラビア〉 令和7年度普及活動の軌跡（一般活動）



エリア別集落懇談会（池田町）



新規就農者激励会（大町市）



カイゼン視察（箕輪町）



あっぷるぼういず経営勉強会（松川村）



オーガニックプロジェクト（大町市）



長野県農村生活マイスター
アクションプラン推進事業（大町市）

〈グラビア〉 令和7年度普及活動の軌跡（一般活動）



乾田直播検討会（大町市）



大北地区水田作検討会（大町市）



アスパラガス新植ほ場現地調査（池田町）



きゅうり目揃い会（松川村）



子実用とうもろこし現地検討（大町市）



電気柵設置指導（大町市）

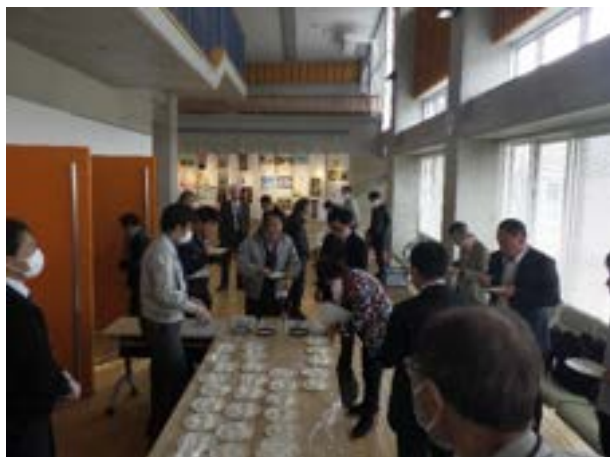
〈グラビア〉 令和7年度普及活動の軌跡（一般活動）



りんご学習会（松川中学校）



ガーデンハックルベリー定植（高瀬中学校）



第3回農政セミナー 米の食べ比べ(松川村)



おむすびづくり体験会（銀座 NAGANO）



北アルプス山麓ブランド県内物産展
（JR 松本駅前）



北アルプス山麓ブランド県外物産展
（銀座 NAGANO）

目 次

はじめに

令和7年度普及活動の軌跡（グラビア）

I 令和7年度の大北農業をふり返って

1 気象経過（気象災害等を含む）	1
2 作柄概況	
◇作物（水稻・麦・大豆・そば）	3
◇果樹	6
◇野菜	7
◇花き	8

II 普及活動の展開と成果

1 重点活動の経過と成果	
◆北アルプス地域の果樹産地維持に向けた担い手の確保・育成	9
2 一般活動の経過と成果	
「北アルプス地域の農業を支える担い手の確保・育成」	
◆地域計画の推進	11
◆カイゼン手法導入による経営改善	13
◆農業経営者総合サポート事業を活用した農業者支援	13
◆新たな担い手の育成・確保	14
◆農ある暮らしへの支援	14
◆農業士協会北安曇支部への活動支援	15
◆大北農業経営者協会への活動支援	15
◆女性農業者の活動促進	16
◇農村女性リーダーの育成	
◇農村生活マイスターの活動促進	
◆アルプスファーマーズクラブ（AFC）の活動支援	18
◆若手果樹生産者グループの活動支援	19
「新技術の活用、持続可能な生産、稼ぐ産地を支える基盤整備の促進」	
◆大北産米の品質向上、需要に応じた米生産の推進	20
◆省力・低コストの新技術を活用した稲作の推進	21
◆水田農業の複合化の推進（競争力のアップ）	22

「マーケットニーズの高い園芸作物の産地づくり」

◆果樹の振興	24
◆野菜の振興	25
◆花きの振興	26
◆畜産の振興	27

「暮らしの場としての農村の振興」

◆野生鳥獣害防止対策の推進	28
---------------	----

「北アルプス山麓ブランド等を活用した地域振興」

◆北アルプス山麓の地域特産品づくり	
◇桜仙狭あずき保存会の取り組み	29
◇「紅梅漬」梅生産の取り組み	29
◇雪中キャベツの取り組み	30
◇クレソン生産の取り組み	30

「多彩な観光資源を活用した食の地産地消と食育の推進」

◆観光と連携した地元農産物の利活用促進	31
---------------------	----

III 調査研究活動結果

1 子実用とうもろこし後作大豆栽培の検証（2年目）	32
2 北部地域（白馬村・小谷村）における振興作物の調査・検討	34

IV 研修報告（試験場研修）

1 高温条件下での水稻全量基肥体系への追肥時期及び効果と必要性の検討	36
------------------------------------	----

V 参考資料

1 農業生産の状況	38
2 管内農業の担い手の動き	39
3 令和7年度水稻奨励品種決定試験ほ調査成績	40
4 令和7年度各種表彰・共進会・コンクール入賞状況	42
5 職員構成と業務分担	43

I 令和7年度の大北農業を振り返って

1 気象経過（令和7年）

(1) 月別気象経過の概要（下記内容について比較は平年との差異）

1月	令和6年12月の年末から年明けにかけて強い冬型の気圧配置となり、北部地域では積雪が増加した。その後、冬型の気圧配置は長続きせず、寒気の影響が弱い時期もあり、中旬から下旬にかけては平均気温も平年よりも高かった。また、日照時間も平年よりも多めであった。
2月	上旬及び中旬にそれぞれ1週間程度強い冬型の気圧配置が持続したため、寒気の影響を受け、北部地域では積雪が増加した。下旬は平年並み～平年よりもやや高い気温になった。
3月	上旬から中旬は天気は周期的に変わっていた。平均気温は寒気の影響が弱かったため、平年並みであったが、寒暖差が大きかった。下旬は降水量が平年よりも少なかった。
4月	天気は周期的に変わっていた。中旬以降に気温の寒暖差が大きくなっており、昼間は20℃を超える一方で、夜間から早朝は氷点下となる日も見られた（大町 4/27 最高気温24.2℃、最低気温-0.8℃）。また、中旬にまとまった降雨がみられた（大町 4/13 降水量44.5mm）。
5月	上旬は数日の周期で天気は変化した。中旬以降は気温が平年よりも高く、晴天の日が多かった。5月22日に梅雨入りし、観測史上最も早くなった地域も見られた。
6月	上旬は晴天の日が多く、空梅雨傾向であった。中旬以降は定期的にとまとった降雨となった日が見られたが時間雨量が多いゲリラ豪雨的な降り方であった。下旬は降雨量が平年よりも少なく干ばつ傾向であった。気温は月を通じて平年よりも高く、高温傾向であった。
7月	月を通じて、気温は平年よりも2～3℃高くなっていた。晴天の日も多く、日照時間も平年よりも多かった。降雨は平年よりも少なく、高温・干ばつ傾向であった。
8月	月を通じて、気温は平年並みからやや高い傾向であった。上旬から中旬にかけてまとまった降雨となる日が数日見られた。下旬は平年よりも少雨傾向で高温・干ばつ傾向であった。
9月	上旬は高気圧に覆われて晴天の日が多くなった。気温は月を通じて平年よりも高い傾向であった。中旬以降は前線の影響を受け、定期的にとまとった降雨となる日が見られ、曇天となる日も多かった。
10月	上旬は晴天の日が多かったが、中旬～下旬は前線の影響で雨の日が多くなった。中旬まで気温は平年よりも高い傾向であり、暖かい秋となった。
11月	高気圧の影響で晴天となる日が多く、降水量は平年よりも少なかった。下旬以降は寒気の影響を受け気温が低い傾向であった。
12月	冬型の気圧配置は長続きせず、天気は周期的に変わった。高気圧に覆われ晴れの日が多かった。降雪は平年よりも少なかった。

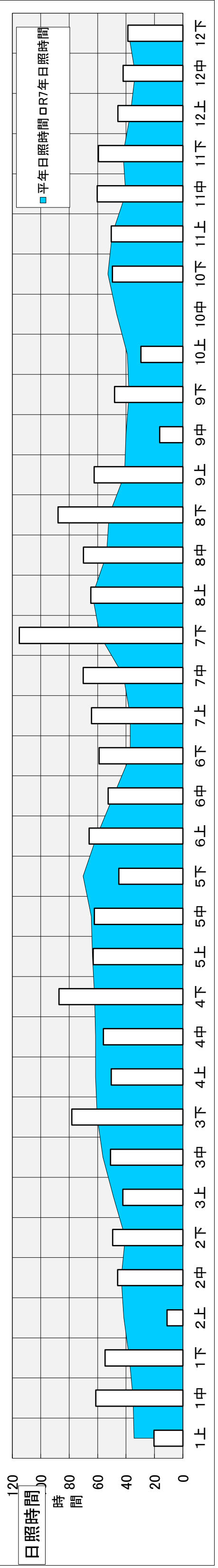
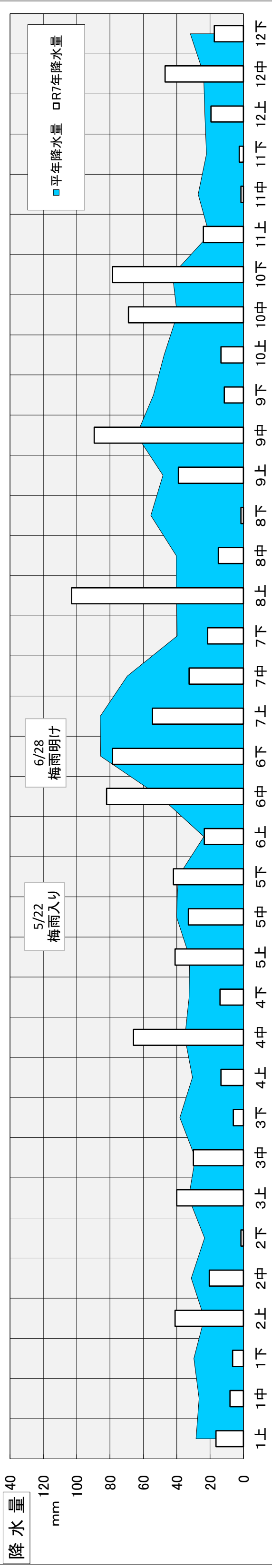
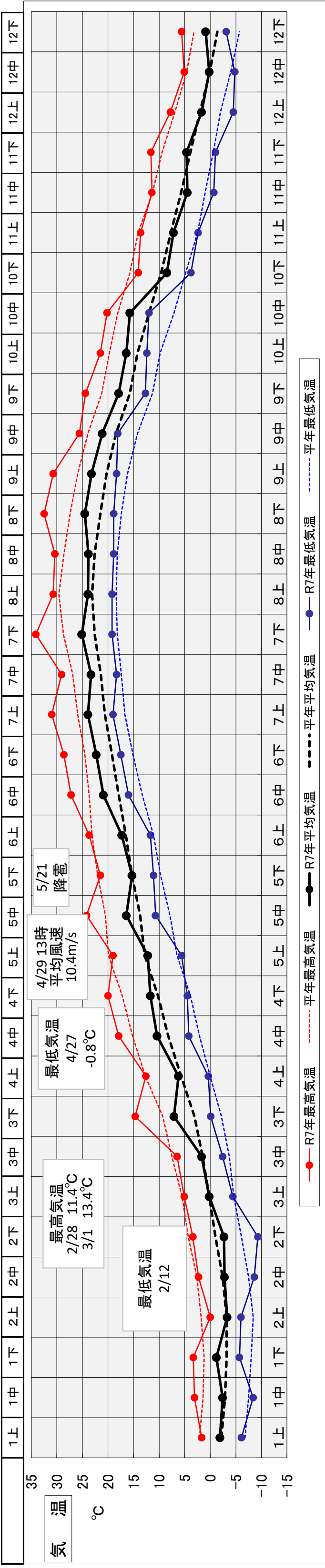
(2) 気象災害等

- ・突風害（白馬村）：4月29日に突風が吹き育苗中のビニールハウスに被害が見られた（最大瞬間風速18.5m/s）。
- ・雹害（大町市）：5月21日に大町市の一部地域で降雹が見られた。りんごやぶどうで被害が発生した。

（青木）

※「長野県・長野地方気象台提供」 平年値は1991-2020年の統計によるもの。

令和7年気象表(大町観測所デ-タ784m) 対平年値



2 作柄概況

作物

1 水稻

(1) 播種～育苗

播種は南部地域では、4月7日頃から開始され、4月15日頃が播種最盛期、中部北部地域では、4月22日頃が播種最盛期となった。

催芽から出芽の段階で品種により出芽具合にばらつきが大きい様子が見られた。原因は令和6年産種子が登熟期に高温の影響を受け、休眠が深くなったためと考えられる。浸種期間をやや長めに設定すること及び、催芽も通常よりも時間を長く設定し、品種ごとに様子を見て対応いただいた。

4月24日頃から寒暖差が大きくなり、一部地域では被覆資材による焼けによる障害が見られる一方で、夜間は0℃付近になり保温が必要な状況であった（4月27日大町最高気温24.2℃、最低気温-0.8℃）。寒暖差の影響でピシムが疑われる苗立枯病の発生が例年より多く見られた。また、日中高温の影響で、籾枯細菌病の発生も例年より多かった。

(2) 田植え～初期生育

畦塗り・耕起等の本田作業は南部地域では例年並みに行われたが、北部地域では、残雪の影響で作業開始が遅れた。

田植えは南部地域では、4月下旬から始まり、連休明けがピークとなった。北部地域では、本田作業の遅れから5月下旬がピークとなった。

6月以降は高温かつ、小雨による多日照の影響で生育は平年よりも進み、DVIによる生育予測では、平年に比べて5～7日早く進んでいた。また、高温による地力窒素の早期溶出等の影響で草丈はやや長め、茎数は品種により昨年と比べてやや多い傾向であった。

(3) 幼穂形成期～出穂期

7月以降も気温が平年よりも3℃程度高い日が続き、いずれの品種も生育は平年よりも5～7日早い状態で幼穂形成期に入った。

南部地域の「美山錦」は7月18～22日、「あきたこまち」は7月24～28日、「コシヒカリ」は7月27日～8月3日に出穂期を迎え、昨年よりも5日ほど早くなった。

8月お盆頃にまとまった降雨があった影響で枝梗いもち、穂首いもちの発生が散見された。

(4) 登熟期・収穫期

梅雨明け（6月28日）以降、高温の影響で登熟が早まり、南部地域の「美山錦」や早生品種の「ゆめしなの」は8月22日頃から刈り取りが開始された。南部地域の「コシヒカリ」は9月5日頃、北部地域の「あきたこまち」は9月8日頃から本格的に刈り取りが開始された。しかし、9月中旬以降の定期的な降雨で刈取り作業が遅れた。長稈の影響で倒伏も見られた。降雨による作業の遅れで管内の刈取り終了は10月25日頃となった。

(5) 収量・品質

出穂後、平年より気温が高く晴天に恵まれたことで登熟は良好であり、収量は平年並み～やや多であるが、ほ場による収量差が大きい。また、登熟期の高温の影響で、白未熟粒の発生が多く見られた。刈り遅れとなったほ場では胴割れの発生が見られ、等級落ちの原因となった。

11月30日現在の一等米比率は、94.8%（県平均93.6%）である。

（青木）

2 小麦（品種「しゅんよう」）

(1) 播種から初期生育

令和6年10月中旬から標高の高い北部で播種作業が開始された。10月下旬に降水が多かったため、11月上旬が播種ピークとなった。播種後極端な降水があったが、全体に初期生育は良好であった。

(2) 越冬前～越冬後

越冬前の生育は播種時期による差が大きく、多くのほ場で平年より遅れており、全体に茎数は少ない傾向であった。

越冬後の生育は、茎数（3月26日調査）は、池田町会染（10月下旬播種）で1,043本/m²、松川村川西（11月下旬播種）で537本/m²、大町市平（10月中旬播種）で555本/m²と差が大きかった。播種期の早いほ場では生育が前進化し、越冬前までに茎数が確保されたが、播種期の遅いほ場や排水性の悪いほ場で、積雪の多い地区では、茎数少なく生育に遅れが見られたものと考えられた。

(3) 幼穂形成期から開花期

4月以降の気温は平年より高めに推移したため、播種期の早いほ場では生育は順調であったが、越冬後に生育不良だったほ場はその後にも生育遅れの影響が継続した。

出穂期は、池田町会染で5月4日、大町市平で5月18日となり、生育の特に早かった前年と比べ7～10日程度遅い出穂となった。5月28日の成熟期調査では、平年と比べ穂長は同等、稈長は短く、穂数はやや少なかった。

雑草発生は、連作年数の長いほ場を中心にイネ科雑草（ネズミムギ、スズメノチャヒキ等）や広葉雑草（ヤグルマギク、カラスノエンドウ、イヌタデ、カモミール等）の多発生ほ場がみられている。一部のほ場ではソバカズラの発生もあった。凍霜害の影響は確認されなかった。

また、コムギ赤かび病対策として、管内全域で5月15日頃（池田町会染）から5月28日（大町市平）にかけて順次開花期防除が実施された。これにより、管内における発病は見られなかった。

(4) 成熟期から収穫

5月末から連作ほ場の一部でコムギなまぐさ黒穂病が発生した。令和5年から継続して全量種子粉衣が行われた種子を用いているが、発病を完全に抑えることはできていない。なお、発生程度は前年より低いものとみられる。収穫物への病害粒混入を防ぐため、6月上旬～中旬の乳熟期～糊熟期に巡回による発生ほ場の特定や、収穫時にはほ場廃棄等対応が行われた。

なお、6月は平年より気温が高い日が続いたことから収穫作業は例年より早まり、南部地域で6月末から開始され7月13日頃には全域で終了した。



小麦ほ場で多発生したソバカズラ（6/9）



コムギなまぐさ黒穂病の発生（5/28）

3 大豆(品種「すずみのり」)

播種作業は5月28日から開始された。播種後の降雨や土壌処理剤の薬害で出芽が劣る事例があったほか、一部の法人では6月中旬の長雨等により作業が遅れたため、播種作業は最終的に7月中旬頃に完了した。

8月1週目が開花のピークとなった。8月上旬は高温乾燥が続いたが、葉の裏返り症状は見られず、8月上旬のまとまった降水(大町8月7日:43.5mm、10~11日:39.5mmなど)により一旦干ばつは解消された。その後は再び高温干ばつ(9月3日まで降雨観測なし)が続き、管内広域のかん水の行われていないほ場を中心に、葉の裏返り症状や株の萎れが確認された。特に、播種が遅かったほ場では干ばつの影響を大きく受けたため着莢数は少ない傾向であった。さらに、全域で吸汁性カメムシ類が着莢期~子実肥大期にかけて長期間多く確認され、落花落莢の被害や成熟期の板ザヤの発生、子実品質の低下に繋がった。これらの干ばつやカメムシ類の被害により、10月下旬には管内広域で株の青立ち症状が発生し、減収や収穫時期の遅れが生じた。

病害防除は、QoI 剤耐性ダイズ紫斑病菌の出現により、対策として種子塗布剤の導入や代替薬剤の散布が行われた。一部の播種の早いほ場や株が繁茂しているほ場では、べと病の発生が見られ、8月下旬から9月上旬に追加防除が実施された。ダイズ葉焼病は平年より発生程度は多いが、収量への影響は少ないものと考えられた。また、管内1ほ場でダイズシストセンチュウの発生があり、今後対策が必要である。

雑草発生は、連作ほ場を中心に帰化アサガオ類等の繁茂がみられた。

収穫作業は池田町で10月29日から開始され、11月下旬には全域で終了した。

4 そば

(1)夏そば

播種作業は例年通り5月上旬~中旬にかけて行われた。一部で湿害の影響を受けたが、全体に出芽や初期生育は良好であった。播種の早いほ場では6月上旬頃から開花期となり、収穫開始時期は平年並みで7月23日から開始された。収穫期の倒伏は少なく、収量は昨年度を上回ったが、一部で高温による登熟不良があったものとみられる。

(2)秋そば

播種作業は7月25日頃から開始され、お盆過ぎには概ね完了した。晴天日が続いたことから播種作業は順調に行われ、播種後の出芽も概ね良好であったが、一部のほ場ではまとまった降水により播き直しが行われた。また、管内広域で生育前半に干ばつの影響を受け、日中の萎れが散見された。栽培期間通して平年より高温で推移したため生育は前進化したが、9~10月はまとまった降水や稲刈り作業の遅れ等もあり、全体に収穫作業は後ろ倒し傾向となった。播種の早いほ場では発芽良く草丈は伸びたが、生育後半の雨で倒伏がみられた。一方、播種の遅いほ場では生育前半に干ばつの影響を大きく受け草丈低く小粒傾向となった。結実率は昨年一昨年と比べると良いが、収量は平年を下回った。

(清原)

果 樹

1 りんご

(1) 令和7年度の生育概要と気象災害

表1 「ふじ」の生態調査結果

調査場所	ステージ	本 年	平 年	平年差
松川村 (標高 640m)	発芽期	3月27日	4月3日	-7
	開花期	4月25日	4月25日	-3
	満開期	4月27日	4月27日	-5
	落花期	5月4日	5月4日	-4
大町市 (標高 750m)	発芽期	4月3日	4月6日	-3
	開花期	4月30日	5月3日	-3
	満開期	5月4日	5月7日	-3
	落花期	5月8日	5月12日	-4



高温により被害を受けたりんごの幼果

結実はおおむね着果量の確保はできたものの、開花期間中の天候不順により受粉環境の不良園地では、「ふじ」の果形が思わしくなかった。また、開花期が早かった影響か、「シナノリップ」「シナノスイート」等に心かび病が散見された。

気象災害では、管内の南部を中心に、6月18日前後の高温で、全般の品種で日焼果を確認した。また、日焼果による果皮直下へのミツ症の発生があり、収穫期に褐変している事例が多くみられた。

(2) 品種ごとの生育及び生理障害の発生

「シナノレッド」の収穫期は平年並みで、「シナノリップ」が前進したことで、収穫期が重なってしまった。昨年と同様に、「つがる」では高温による日焼け防止を意識して、葉つみ・玉回し作業が進まなかったため、着色が遅れ、収穫が思うように進まなかったと推測される。

中生種は、高温傾向が続いたが、着色は近年の中でもとても良好な年となった。地域により「シナノゴールド」は、成熟の差が大きかった。

「ふじ」は、果実肥大について平年並みからやや小さい傾向であった。熟度調査地点(大町市大町)の熟度は、満開後日数からおおむね平年並みであった。みつ入り程度は、満開後178日頃から向上している。

(3) 病害虫の発生状況

病害では、春先から腐らん病・赤衣病・胴枯病の発生が散見された。また、褐斑病の発生が6月上旬から松川村の数件で確認された。おおむね9月から地域全体で褐斑病の発生が目立ちはじめ、生育の後半に発生がみられた園地が多い傾向であった。また、9月以降から炭疽病、輪紋病の発生が園地によってみられた。

虫害では、各地で夜蛾などによる吸汁害がみられた。害虫トラップ調査では、平年に比べキンモンホソガ及びシンクイムシ類の誘殺数が多かったが、適期防除により大きな被害とはならなかった。

2 ワイン用ぶどう

開花期は池田町では6月上旬、大町市では6月中旬頃と平年より若干早かった。また、7月23日の降雹により池田町の醸造用ぶどうを中心に、葉や房への打撲等の被害がみられた。園地により、脱粒や打撲がみられ、収量低下となった。

成熟期は、池田町の「シャルドネ」は9月14日頃から、「メルロー」は9月28日頃から収穫始めとなり、大町市の「シャルドネ」は9月26日頃から、「メルロー」は10月3日頃から収穫が開始された。

病害では、晩腐病やべと病が一部の園地で発生し、収量の低下につながった。虫害ではハモグリダニやトリバ類の被害がみられた。

(伊藤)

野菜

1 白ネギ

定植は5月に行われた。6月下旬まで降水は平年並みで、気温は平年並みからやや高く、活着から初期生育はおおむね順調であった。6月28日に梅雨が明け、7月上旬から9月上旬までかなり気温が高い期間が続き、降水量も平年より少なく干ばつ傾向でとなり、草丈の伸長や茎の肥大は抑制される傾向となった。9月に入り個選の出荷が始まったが、細物が多い傾向であった。秋まで気温が高く降雨が少ない傾向は続き生育は遅れる傾向にあった。10月以降気温の低下に伴い伸長・肥大が進んだ。10月下旬、共選出荷の始まりとともに出荷が本格化した。

病害虫では盛夏期を中心にネギアザミウマやネギハモグリバエの発生が見られた。また、黒斑病の発生がやや目立ったが、さび病の発生は少なかった。

作付け、出荷量は前年並みであった。

2 アスパラガス

ハウス半促成栽培は3月下旬に平年よりかなり高めで推移したが、平年並の4月上旬からの収穫となった。立茎作業は5月中旬頃から始まった。露地栽培も、高温傾向ではあったが昨年と同様の4月下旬からの収穫となった。昨年、茎枯病等が多発し株養成不足となったほ場では、春どり収量は伸び悩んだ。立茎は6月上旬から始まった。

7月～9月はかなりの高温傾向が続き降雨も少なく、夏秋どりは空洞茎や曲がりによる品質低下が目立った。また、一部ほ場で斑点病の発生が見られた。

病害虫について、高温・多雨で推移したため、アザミウマ類、ハダニ類の発生が見られたほか、露地栽培を中心に梅雨時期から茎枯病が見られ、8月上旬の降雨で斑点病や褐斑病の発生が増加した。

なお、令和8年度にアスパラガスの新植を予定している松川村と池田町のそれぞれ1ほ場で、排水対策のためのカットブレイカー施工が冬季に行われた。



アスパラガス新植予定ほ場でのカットブレイカー施工（松川村）

3 ジュース用トマト

定植作業は5月中旬頃から開始された。定植後は凍霜害の被害はみられなかったが、一部の水田転換ほ場では湿害の影響を受けた。全体に高温傾向で推移したため、茎葉部は過繁茂気味であった。収穫開始時期から高温・干ばつによる影響を受け、前半は尻腐れ果が多発生した。日焼け果の発生もみられたが、昨年よりは少なかった。収穫期間通して高温で推移したため、全体に小玉傾向であり、収穫作業は出荷期間（～9月15日）前に切り上げる生産者が多かった。単収は昨年を上回ったが、栽培面積の減少により総出荷量は昨年を下回った。

高温・干ばつの影響により病害虫の発生は比較的少なかったが、オオタバコガの発生が多く、10月に入ってからフェロモントラップによる誘殺があった。

4 夏秋どりイチゴ

定植後から気温が高温で推移したため、初期生育は順調に進み、5月上旬から徐々に花上げ作業が始まった。梅雨明けが6月末と早かったことから、収穫最盛期は7月前半と前進化した。梅雨明け以降高温が続いたことから、成り疲れの影響が長期化し、その後の株の回復が遅れたことにより、盛夏期以降の収量は減少した。

病害虫はアブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類等の微小害虫の発生が多く、防除適期を逸し密度が高まった場合に減収した。また、高温の影響を受け複数のほ場で萎黄病の発生がみられ、罹病株の除去や栽培終了後には土壌消毒や資材の消毒作業が実施された。盛夏期の高温や病虫害の多発生により、管内の収量は昨年を下回ったものとみられる。

(清澤、清原)

花 き

1 トルコギキョウ

6月下旬～9月上旬にかけて真夏日となる日が多く、記録的な気温となるなど高温傾向が続いた。そのため、換気・かん水等の管理が難しくなり、生育は前進し、出荷も平年より早めの収量となった。

抑制作型は、平年よりも暑い日が続いたため、7月～8月上旬の定植後の高温により早期抽苔傾向が見られ、草丈が平年よりも短く短径開花が見られた。

近年は生育期間中高温となることが多く、本年も高温による生育への影響や病虫害の発生などの課題があった。

(1) ハウス内高温対策

防虫ネットの設置により換気不足となりやすく、ハウスの側面や肩だけでなく妻面や天井換気により熱を逃がす取り組みが必要である。また、抑制作型では遮熱資材の被覆や細霧冷房によるハウス内温度の抑制、短日処理の導入による品質維持対策の検討も必要となる。

(2) 害虫の多発

オオタバコガやアザミウマ類、ハダニ類は高温により発生量が多くなるとともに、生育後半まで発生が続いた。施設内が高温となり日中の防除ができず、初発時の防除タイミングを逃し防除が後手に回ってしまう例が見られた。

(3) 根腐病・立枯病

根腐病は本年度も一部のハウスで発生がみられたが、土壌消毒を徹底したほ場では発生が抑えられた。作付け前の防除の徹底や周囲からの持込み防止が必要である。また、品種転換や輪作も視野に総合的な対策が必要となる。

2 ヒマワリ

6月下旬～7月中旬にかけて例年に比べ降雨が少なく、は種作業や初期生育はおおむね順調であった。例年は降雨の影響による発芽や初期生育の不揃いにより、品質・出荷作業に悪影響が出るため、事前の排水対策を十分に行い、早めのほ場準備をしておくことが重要となる。一部でべと病の発生が見られた。梅雨時期のは種作型では、べと病の発生が多くなるため薬剤防除を徹底する必要がある。

3 シクラメン

7月～8月は高温が続く苗の生育が停滞し、肥培管理の判断が難しくなった。また、かん水の回数も多くなり水管理に労力が必要となった。

花芽が形成される7月～8月に暑い日が続いたことで開花が遅れ、特に5号鉢の開花が平年よりも10日～2週間ほど遅かった。また秋期の気温も高めだったため生育が停滞気味となり、開花の遅れを助長した。

夏秋期の高温による花芽分化・開花の遅れが課題となっているが、早めに十分な換気を行うとともに、遮光資材や細霧冷房等の導入による温室内の高温対策の検討も必要となる。また、害虫の発生も多くなっており、適切な薬剤をローテーションしながら発生初期を重点に丁寧な薬剤散布が重要となる。

(清澤)

II 普及活動の展開と成果

1 重点活動の経過と成果

重点活動課題：北アルプス地域の果樹産地維持に向けた担い手の確保・育成

■背景とねらい

北アルプス管内の中南部は果樹の産地であるが、近年後継者不足から園地を放棄することや廃業する事例が増えつつあり、産地を維持発展させる上で大きな課題となっている。

管内の果樹生産者は、約180名で年齢層は60歳代以上が中心となっている。更に、後継者がいる果樹経営体での園地維持は限界に近い状況となっている。今後、産地を維持していくためには、新たな担い手の確保・育成を行い、栽培面積の減少、遊休荒廃樹園地の増加に歯止めをかける必要がある。

そこで、管内の果樹経営で自立できるりんご・ぶどう・ももを選定した。新規就農者や里親研修修生はじめ、経営継承者が就農後5年程度で経営が安定し、新規就農者が5年後には、新たな就農希望者のモデルや相談者となることを目的に活動した。

(重点活動の期間：令和7年度～9年度)

■本年度の取組

本年度は重点活動初年として、対象者の就農に向けた課題を整理し、関係機関と連携することで、明らかになった課題の解決や重点対象者の自立や安定した経営に向けて活動を展開した。

1 里親研修制度を利用した新規就農者の確保育成

里親研修生の個別課題解決の支援をはじめ、新たな研修生の確保のため、里親登録者の拡大や就農相談会をおこなった。

2 新規就農者の経営確立

新規就農者の栽培技術習得及び経営確立に向け、毎月の巡回指導や初心者向けの各種セミナーを開催した。また、青年等就農計画の認定に向けた経営計画作成支援を4名対象に実施した。

3 開園農地の確保と施設・機械の整備

就農農地の確保に向けた農業委員会と連携した支援や果樹の省力化栽培技術の導入に向けた土壌調査を行った。

4 新規就農者確保、産地のPR

新たな就農者を確保するために、就農相談会に使用できる就農パンフレットの作成を開始した。

■本年度の成果

1 里親研修制度を利用した新規就農者の確保育成

対象者2組の里親研修生の個別課題解決に向けて、毎月1回巡回し、関係機関と取り組み状況や指導状況などの情報を共有した。里親研修生の中では、研修以外に休日・祝日に就農予定地の管理を積極的に取り組むなどの姿が見られた。

また、里親登録者の拡大に向けて、篤農家に声かけを行い新たに3名の果樹農家が登録に向けて取り組み認定した。その他にも里親登録者候補がおり、課題共有や登録に向けて検討することができた。



里親登録者拡大に向けた訪問（大町市）

2 新規就農者の経営確立

(1) 令和7年度就農者への支援

令和7年度の果樹就農者は2名で、毎月、就農状況を確認した。1名に対しては、BCP（事業継続計画）について対象者と内容を確認しつつ作成することができた。



BCP（事業継続計画）作成支援（大町市）

令和7年北アルプスりんごセミナーを管内ではじめて開催した。特別講座を含め、講座を7回開催した。特徴として、セミナーの会場を毎回違う篤農家の園地として、顔合わせや先輩からの実体験のお話などを聞ける機会を作り、密度の濃いセミナーとなった。



りんごセミナー篤農家からの説明（大町市）

(2) 令和8年度就農予定者の就農計画作成支援
 青年等就農計画の認定に向けた経営計画作成支援を大町市3組、池田町1組の合計4組の対象に実施した。本人の経営計画の意向と5年後に目標達成できるか検討を重ねた。無事に、4組について市町村の認定を受けることができた。



就農面談及び就農計画作成支援（大町市）

3 開園農地の確保と施設・機械の整備

(1) 就農農地の確保支援

里親研修生1組が、令和8年4月からの就農農地が未定であったため、令和7年月に大町農業委員会、大町市役所と連携し、候補となる3園地を巡回し決定した。どのほ場も遊休荒廃地であったが、土壌の土目や用水路の確保、集荷などの立地条件を総合的に判断して農地を決めることができた。



就農農地の確保支援（大町市）

(2) 省力化栽培技術の導入推進

省力化技術のりんご高密度植園及びぶどう短梢栽培を導入する予定者を対象に土壌団粒構造状態を確認した。令和5年度（2023年度）普及に移す農業技術（第2回）を参考に調査した。

採土管100ml容積あたりの乾土重（g/100ml）が117g以上で土壌の固相率が概ね45%以上となり、130gを超えると固相率が50%以上と推定できる。AからFの6カ所を採土し、乾燥後の重量を確認した（表1）。2カ所130g/100mlを超えたため、専門技術員と土壌断面調査や排水状況を確認し、土壌改良方法を提案し、実践した。

表1 りんご予定土壌の採土100ml重量（g）

	A	B	C	D	E	F
採土直後	164	157	132	172	174	174
乾燥後	115	113	100	129	131	133



土壌断面調査及び排水状況の確認状況（大町市）

4 新規就農者確保、産地のPR

就農相談会等で活用できる就農事例作成を令和9年までに完成させるため、令和7年は取材及び関係機関との意見交換を開催した。

事例は、①Iターン者からの里親研修制度の活用、②親元就農、③地域おこし協力隊からの就農者を対象として取材を実施した。

■今後の課題と対応

重点対象者が、令和7年就農者2名、令和8年就農4組である。令和8年から就農する対象者が多いため、定植や初期管理の指導が重要となるため、重点的に取り組んでいきたい。

また令和7年末に、りんご・ぶどうでの就農希望者がいたため、新植ほ場等の土壌調査を追加で実施したいと考えている。

引き続き、関係機関と連携し、就農希望者の確保及び安定的な経営を確立するため、就農相談から講習会、個別巡回をする予定である。

（伊藤）

2 一般活動の経過と成果

地域計画の推進

■背景とねらい

地域農業振興の基礎となる「地域計画」の策定が市町村で進められている。

守り・残すべき農地と、それを耕作する担い手の明確化など、策定に必要な支援が求められている。

■本年度の取組と成果

1 各市町村への支援

[大町市]

地域計画策定後の見直し検討会が2月24日に開催され、今後のブラッシュアップ方針について意見交換の場となった。

また、当日は県によるブラッシュアップ重点支援地区の設定についても検討が行われ、地域計画6地区のうち、10年後に75歳以上となる認定農業者とその面積が最も多くなることが予想される常盤地区を設定することで決定した。今後は、市によるアンケート調査の実施やその結果を基にした後継者育成等の課題について意見交換会の場を設定する予定である。常盤地区は条件の良い農地が多く、全体の耕作者も多い一方、基盤整備されていないほ場や水利や傾斜地等条件の悪い農地も多い。支援センターとして、重点地域の設定と関係機関と連携した支援を行い、モデル的な取り組みとして他地域への波及を図ることも想定したい。



地域計画検討会（大町市）

[池田町]

町役場による池田町農政懇談会を令和7年6

月20日、7月31日に開催し、町の方針の説明後、生産者の町に対する考え等の意見交換を実施した。その他にも、町役場主催で7月23日に内鎌地区、7月23日に醸造用ぶどうに絞った農政懇談会を開催した。

令和7年11月26日から池田町を6エリアに分て、地域住民を対象としたエリア別農政懇談会（地域計画見直し）を開催し、総勢73名の生産者の出席があった。いずれの地区でも鳥獣害、水路の補修、担い手不足の課題が挙げられた。また他の市町村境の道路や草管理等が問題になっている。それぞれのエリアごとでも考えが違う部分があるため、エリアに合った地域計画や営農となるように支援が必要だと感じられた。

その他に、池田町会染西部農地の土壌改良支援や温度測定を通じたアスパラガス栽培支援や醸造用ぶどうほ場の支援、林中地区の基盤整備打ち合わせ会の支援を実施した。

池田町の耕作や状況が日々、変化しているため、今後の地域計画や将来の農業が問題なく耕作できるように支援していきたい。



エリア別農政懇談会の様子（12月 池田町）

[松川村]

水稲単作地帯である松川村では、基盤整備された農地を中心に、水稲を主要作物としつつ、担い手農家の経営安定を図るため、園芸品目との複合経営を推進するとともに、省力化や低コスト生産技術の導入及び普及を推進。中山間地域の農地を中心に樹園地として集積・集約化を推進し、農作業の効率化や生産性の向上を図り、産地づくりを目指す地域計画となっている。

農地の保全と持続性の高い有効利用を図るため、農地中間管理事業を活用し、規模拡大に意欲的な担い手への農地の集積、集約化を推進して2年が経過した。

今年、11月6日～11月26日にかけて地区別に5回行われ、色塗りされた現状の地図を基に話し合いが行われた。



地域計画協議の場（松川村）

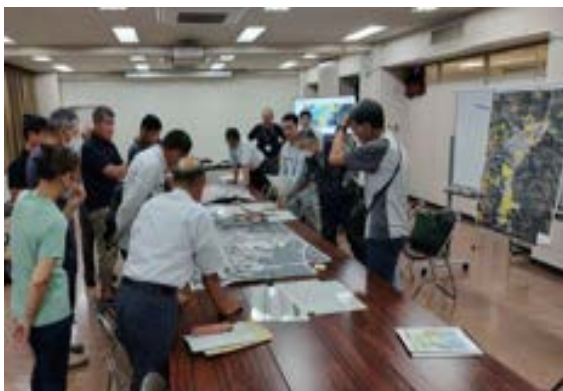
協議の場の結果を踏まえて村で目標地図が策定された。3月27日に地域計画検討委員会での協議を行い新たな地域計画が策定された。

支援センターも出席し、助言等を行った。

[白馬村]

11月に「地域計画随時見直しに係る話し合い」を行なった。地域計画運用開始見直しに伴う農業委員会、担い手農家の話し合いで目標地図のブラッシュアップや目標地図は圓光素案の作成等を検討した。

12月に「担い手農家(10ha以上)との懇談会」を行った。各担い手農家へ、将来の受けてが決まっていない農地の耕作を依頼した。白馬村では、地主自身が耕作しないまま確保し、売れる時期を見計らっている状況で放棄地が増加している傾向である。



地区懇談会の様子（8月、白馬村）

[小谷村]

5月に小谷村農業再生協議会総会が開催され、地域計画の目標地図作成の報告が行われた。

1月には、池原・黒川集落営農組合の法人化についての研修会を行い、合同会社設立にむけての検討を行っていく予定である。

■今後の課題と対応

地域計画は策定して終わりではなく、毎年計画を見直し、修正していく必要がある。

今後も地域計画の完成度を高めるための支援を継続して行っていく。

（篠田、清原、高野、岡部、伊藤）

カイゼン手法導入による経営改善

■背景とねらい

次世代の中核的経営体を育成するため、支援チームを編成し、トヨタ式カイゼン手法を用いて収益向上に取り組む経営体の拡大を目指す。

■本年度の取組と成果

今年度は果樹と水稻の複合経営をされている経営体（大町市）を対象に取り組みを行った。

1 カイゼン活動の取組

対象経営体は、面積規模も大きく従業員も多く雇用されている。一方、現状はタイムカードでの労務管理が主であり、繁忙期となる果樹の収穫・出荷作業が中心となる時期には、従業員の勤務状況が把握しにくい点が課題であった。そこで、従業員の動きを見える化し、経営主と従業員の連携向上や業務の効率化を図ることを目的とし、作業ボードの作成について提案したところ、導入に意欲的であったことから、手始めにカイゼン手法を導入されている先進的な果樹経営体の視察を行うこととなった。7月に蓑輪町の与古美農園の視察研修を実施し、支援センター職員も2名同行した。作業ボードの導入・活用状況について直接説明を受け、経営主には導入に当たりイメージを持ってもらうことができた。今年度の手法導入を目標に取り組みを開始したが、果樹収穫繁忙期には間に合わず、具体的内容について従業員も交えて再度検討し、次年度に向け本格的に実践することとなった。



与古美農園（蓑輪町）の視察

■今後の課題と対応

引き続き、経営体へカイゼン手法の周知や導入の支援を行い、カイゼン手法の実践により収益性の向上を図る。
(清澤、清原)

農業経営者総合サポート事業を活用した農業者支援

■背景とねらい

当事業は地域の農業経営体の発展を支援するため、国の事業として平成30年から始まり、今年度で8年目となった。県では「長野県農業経営・就農支援センター」を設置し、支援センターは現地相談窓口となっている。

農業者が抱える様々な経営的課題に対して、解決に向けて専門家と連携して伴走支援を行っている。

■本年度の取組と成果

1 重点指導農業者への支援活動

継続して支援対象としている重点指導農業者のうち、2経営体について、作業効率化や施設投資について相談対応を行った。作業効率化を目指す、経営体に対しては先進地視察を実施した。

また、指導対象となっている経営体に対して個別巡回を行い、経営状況の把握や課題について聞き取りを行い、研修会等の情報提供を行った。

2 新規重点指導農業者への支援

新たに経営の法人化を相談された経営体1件に対しては、専門家派遣を行い、現状の経営状況の分析と、法人化の利点等について指導が行われ、中長期的な経営ビジョンの策定が具体的に取組むべき課題として明確化された。

3 担い手農業者団体への伴走支援

地域の担い手となる農業者から組織された団体に対して、労務管理に係る勉強会の開催希望があり、専門家の派遣を行い、研修会を開催した。専門家から事業者として遵守すべき法令の内容、従業員の雇用に際して配慮の必要な労働環境等について、講義が行われた。

■今後の課題と対応

農業者が抱える経営課題は様々であり、相談内容も多様化かつ複雑化してきている。専門知識を必要とする経営課題に対しては、この事業を活用し、専門家の協力や助言を得ながら個々の状況に合わせて伴走支援を行っていく。

(青木)

新たな担い手の育成・確保

■背景とねらい

担い手の高齢化や減少に対し、新規就農者の育成・確保を推進するため、市町村やＪＡ大北等、関係機関と連携し体制を組み支援した。

■本年度の取組と成果

1 就農相談窓口の設置

7月1日に市町村・ＪＡ大北等の担当者による「北アルプス地域就農促進連絡会議」を開催し、新規就農者や就農相談の状況、就農支援制度や取り組み状況等を各機関から説明し意見交換を行った。

7月6日と11月16日には、ＪＲ有楽町駅前の東京交通会館にて、主に首都圏の方を対象とした移住相談会に「就農相談コーナー」を設けて、農ある暮らし地域サポーターと就農相談にあたった（相談4組6名）。



就農相談の様子（東京都千代田区）

2 里親研修生・修了生への支援

里親研修生や就農5年以内の研修終了生4名に対して個別巡回を行った。毎月、継続して所内会議で巡回内容を共有しながら、就農計画の目標達成に向けて課題解決に取り組んだ。

■今後の課題と対応

就農希望者には、就農に向けて的確な情報提供や助言をしていきたい。

新規就農者に対しては、現地巡回を通して解決の道筋を相談し、就農計画を後押しする。

里親研修の推進により、新規就農者の確保に努める。
(高野)

農ある暮らしへの支援

■背景とねらい

農を暮らしの一部に組み入れ、豊かな生活を送る「農ある暮らし」を北アルプス地域でも支援していくことになり、平成31年からＪＡ大北の「ええっこの里」が農ある暮らしサポート直売所に位置づけられた。北アルプス地域振興局がＪＡ大北と一緒に県内外の農業に関心のある移住者や定年帰農者などを対象に相談対応や情報発信を行った。

■本年度の取組と成果

1 農ある暮らしサポート相談会の開催

大町市のＪＡ「ええっこの里」直売所で「農ある暮らしサポート相談会」を、月に2回行った。ＪＡ大北の技術員の他、参加者が多い日には当支援センターの野菜担当者が出張して相談役を務めた。

相談内容は、野菜の栽培方法が多かったが、作物栽培の基本となるほ場の選定や土づくり、品目ごとの特徴や病虫害防除の基礎知識等を交えて対応した。

相談者は4月～1月までで計12組で、昨年度の16組を下回った。

2 北アルプスの麓で暮らし・働く大相談会

11月16日に、ＪＲ有楽町駅前の東京交通会館で、主に首都圏の方を対象とした移住相談会「北アルプスの麓で暮らし・働く大相談会」に「農ある暮らしサポート相談コーナー」を設置し、農ある暮らし地域サポーター相談にあたった。（相談4組6名）

■今後の課題と対応

「農ある暮らしサポート相談会」を月2回のペースで継続的に推進する中で、相談所設置のＰＲや相談内容の充実を図り、北アルプス地域の市町村の魅力を発信して、相談者数の増加を目指し、農ある暮らしの実践の支援を継続する。

(高野)

農業士協会北安曇支部への活動支援

■背景とねらい

農業士協会北安曇支部は15名で構成され、情報交換を行いながら、地域の農業を担うリーダーとしての資質向上や個々の経営発展につながる活動をしている。

■本年度の取組と成果

1 支部事業の実施

(1) 新規就農者激励会の開催

アルプスファーマーズクラブ（AFC）と共催して7月10日に大町合同庁舎で開催した。

北アルプス地域の新規就農者が地域農業の担い手として活躍するよう、農業士協会、AFC等の先輩農業者や関係機関等との交流を深め、幅広い横の繋がりを確保するために開催し、8名の新規就農者が出席した。

(2) 大町・安曇野地区 水稲直播視察研修会への参加

水稲直播栽培は水管理や肥培管理、播種時のほ場条件等、栽培技術上の課題が多い。

そこで、大町と安曇野で取り組まれている乾田、湛水直播のほ場を見学し、栽培上の工夫や課題等の情報を互いに共有することで、生産者同士の交流、及び栽培技術の向上を目的に、7月22日に開催された。



水稲直播視察研修会(大町市)

2 県協事業への参加

12月25日に開催された「知事とのファーマーズ会議」に参加し、意見交換を行った。

■今後の課題と対応

会員の経営課題の解決につながる研修会の開催や視察の実施により活動を充実させる。さらに、新たな農業士確保のため、様々な機会をとらえて勧誘活動を行う。(高野)

大北農業経営者協会の活動支援

■背景とねらい

大北農業経営者協会は会員17名で構成され、地域の中心的な経営者として関係機関等と連携を図り、後継者の育成・確保や地域農業発展のため活動している。

■本年度の取組と成果

1 支部事業の実施

(1) 南安曇農業高校との交流会

7月31日に、支部間交流活動として、県農経協北安曇支部と南安曇農業高校生徒・教諭、安曇野支部、松筑支部会員等との交流会が開催された。当日は会員2名が出席し、後継者育成について教諭と農業者のそれぞれの立場から意見が出され、活発な意見討議がなされた。

(2) 県農経協主催、JAグループとの意見交換会

8月29日に開催されたJA・農政部との意見交換会で、「地域計画後の計画見直しにおけるJAの役割について」と題し、代表として北安曇支部から提言事項を発表した。JAからは、さらなる農地の集積や、関係機関との連携を強化し、ともに長野県農業を発展させていきたい旨回答があった。



北安曇支部長による提言発表

■今後の課題と対応

地域農業の今後の発展に向け、経営者の立場から行政等との意見交換を実施したい。

また、活動の継続・発展に向けて、引き続き新規会員の勧誘や認定支援を行う。

(清原)

女性農業者の活動促進 農村女性リーダーの育成

■背景とねらい

女性農業者を対象に、農村文化に関する知恵と技の伝承と世代を超えた交流を図り、次世代に繋ぐ農産加工技術を習得するため、農業リーダー等育成研修事業等を活用し、農村生活マイスター協会北安曇支部と共催で農村女性セミナーを開催した。

また、意欲的な農村女性に地域の実践的リーダーとして活動してもらうことをねらいに、農村生活マイスター認定候補者の育成を行った。

■本年度の取組と成果

1 農村女性セミナーの開催（7/4、大町市）

（受講者5名、マイスター・関係者16名参加）

檜木こうじ店（小谷村）の檜木歩氏を講師に迎え、「発酵ダレづくり講座」を開催した。

発酵食品に関する基礎知識を学ぶとともに、講師手作りの塩麴、醤油麴、玉ねぎ麴をベースに、オリーブオイル・酒・酢・ハーブ・しょうが・ゴマなど何種類もの調味料の中から、自分の好きなものを混ぜて、万能に使える発酵ダレづくりの実習を行った。

お互いの発酵ダレを味見したり、レシピを交換したり、マイスターや農業・農村生活に興味がある方などの間に、今回の講座を通じて多くの会話や交流が生まれていた。自身の日頃の活動を紹介するマイスターもおり、とてもよい情報交換の場にもなった。



自分だけの味の発酵ダレづくり

2 農村生活マイスター認定候補者の育成

管内5市町村の中で最も会員が少ない白馬村と小谷村からそれぞれ1名の認定候補者を掘り起こした。レポート作成の指導など年間を通して支援を行った結果、2名ともマイスター認定され、北安曇支部の令和8年度会員数は53名となる。



令和8年度長野県農村生活マイスター協会総会3/18
県下各地域における新規認定マイスターのお披露目

■今後の課題と対応

農村女性セミナーは、マイスター及び一般農村女性が一堂に会し、各自の知識・技術を高め、お互いに交流を深める大変よい機会であるため、引き続き開催していくことが必要である。今後も年齢・経験を問わず受講者が興味を持てる講座内容を検討し、有意義と感じてもらえる講座を提供していきたい。

マイスター認定候補者の育成についても、上述の女性セミナーのような場での交流をさらに深める中で、新規候補者の掘り起こしを進め、地域で活躍できるマイスターを少しずつ増やしていきたい。（佐藤）

女性農業者の活動促進 農村生活マイスターの活動促進

■背景とねらい

県農村生活マイスター協会北安曇支部では54名の会員が、食農教育や地産地消、特産品の開発・販売など様々な場で活躍している。地域の農業や暮らしを支えるマイスターとしての資質向上に向けた活動を支援した。

■本年度の取組と成果

1 北安曇支部視察研修(9/4、下伊那方面)

(会員16名、一般農村女性4名、事務局3名、計23名参加)

国の「女性が変わる未来の農業推進事業」を活用し、下記の視察研修会を開催した。国の事業を活用することで参加者負担が少なく、多くの会員が有意義な情報収集・情報交換を行うことができた。

(1) 中川村「株式会社大島農園」

有機野菜多品目栽培・直接販売を行う農場を視察した。参加者は栽培方法や販売方法等について次々に質問しており、積極的に情報収集を行っていた。



「株式会社大島農園」で栽培方法の見学

(2) 「道の駅 花の里いいじま」にて、飯島町産業振興課市村國洋氏から遊休荒廃地対策としての「飯島町の栗の里づくり」について、女性グループ『おいもちゃん』の塩澤尚美氏からは「本郷地区営農組合における農産物加工」について説明を受けた。

(3) 宮田村「食ごころ」

レストラン・直売所・農産物加工を営む吉澤小百合氏から、地産地消の学校給食や農業振興など、食で繋がる地域コミュニティーを高めながら活動している様子を紹介してもらった。

2 地域における農村文化の伝承事業(郷土食料理講習会)

(10/28、大町市平公民館)

(会員19名、一般農村女性5名、事務局2名、計26名参加)

大町市出身の料理研究家である横山タカ子氏を講師に迎え、地域の郷土料理に関する基礎知識を学ぶとともに、郷土食7種類の調理実習を行った。

意見交換の場では、池田町における郷土食の普及・伝承活動について上原千栄子氏が事例発表を行った。

時代の流れとともに、古き良き食文化が失われつつある中で、あらためて昔ながらの伝統、地域食及び農村文化の伝承の大切さを学んだ。

3 シカ肉ジャーキー作り講習会

(12/8~10、大町市常盤公民館)

(会員12名、事務局3名、計15名参加)

北安曇支部主催で「第4期長野県食と農業振興計画」の女性活躍に関するアクションプラン推進事業としてシカ肉ジャーキー作り講習会を開催した。

地域で課題となっている鳥獣害対策の一端として、地域内で捕獲されるジビエ(シカ肉)の活用方法を学ぶため、支援センター所長を講師に、ジャーキー作り作業を3日間体験した。

1日目は肉のスライスや漬込み、2日目は水洗いと自然乾燥、3日目は火力乾燥と燻煙を行った。燻煙の待ち時間にはシカ肉を使ったハヤシライス調理実習を行った。

身近なもので取り組めるように、「燻煙器」は段ボールを利用し、参加者からの希望でチーズの燻製も試みた。



段ボールを利用した燻煙器

■今後の課題と対応

会員自らが必要な研修会・講習会を企画・運営できるよう促し、今後も会員間の交流や地域での活躍の機会が増えるよう支援していきたい。

(佐藤、篠田)

アルプスファーマーズクラブ (AFC) の活動支援

■背景とねらい

アルプスファーマーズクラブ(通称AFC)は、北アルプス地域の青年農業者により組織されており、現在の会員数は約30名である。会員の経営形態は水稲、果樹、野菜、畜産と多岐にわたる。定例会等で会員同士情報交換を行いながら、農業経営者としての資質向上を目指す活動を事務局として支援した。

■本年度の取組と成果

1 定例会の開催(4月～2月)

令和7年4月～令和8年2月まで計10回程度の定例会を開催した。今年より、当番幹事制が導入され、若手メンバーの意見が活動に反映されやすい環境となった。会員が抱える悩みや今後の活動について、年代を超えて活発な意見・情報交換が行われた。

2 新規就農者激励会の開催

令和7年7月10日に、新規就農者激励会を開催した。今年度の新規就農該当者は9名で、その内8名の出席があった。ベテラン会員と若手会員のそれぞれ1名ずつから、就農後の悩みやその解決方法、AFCや地域での仲間作り活動について事例発表を行った。先輩農業者からの地域に根ざした活動の紹介は、これから地域の担い手として自立していく新規就農者にとって非常に参考になるものだったと思われる。その後、懇親会にも多くの会員が出席し、交流を深めた。



新規就農者激励会の様子

3 管内視察研修会の開催

7月23日に、若手会員のほ場を視察する研修会を行った。今回は野菜の育苗ハウスを見学し、高温期における野菜の育苗管理の注意点を学んだ。また、新規就農者激励会に出席した方からも参加があり、若手会員との親睦を深める良い機会

となった。



会員の育苗ハウスを視察するメンバー

4 農産物直売会の開催(8月、10月)

8月10日、と10月12日に白馬岩岳リゾートで農産物の直売会を開催した。8月はももやとうもろこし、10月はりんごやお米等を中心に販売した。会員自らが、自分たちで生産した農産物の魅力を直接消費者へ伝える場となり、今後の販売力強化への参考となった。



農産物直売会の様子(白馬村)

5 オーガニックシンポジウムへの協力支援

令和8年1月25日に、オーガニックシンポジウムへ特別栽培や有機栽培に取り組む会員が参加した。異業種交流会では、自身の農産物について商談シートを作成し、飲食店や宿泊業等の実需者との交流会を行った。実需者が求める農産物について勉強になり、AFC以外の団体で活動する方との親睦も深まった。



オーガニックシンポジウムの様子(大町市)

■今後の課題と対応

団体での活動が会員の抱える課題の解決に繋がるように支援するとともに、会員の主体的な活動を促していく。

(青木)

若手果樹生産者グループの 活動支援

■背景とねらい

「(一社) あっふるぼういず」は、松川村の若手りんご生産者を中心に会員12名で構成されている組織であり、令和4年度に法人化した。

あっふるぼういずでは、定期的な勉強会や県内外での直接販売イベント等を通じて、消費者が求めるりんごやその加工品(品質、味等)を把握し追求するとともに、環境保全型農業に取り組むことで顧客の獲得や信頼確保に努めている。

また、新規就農者育成や高齢化により作業が困難となった水田畦畔の草刈り等の農作業受託など、地域農業の保全・発展に貢献する事業を幅広く展開している。

こうした経過を踏まえ、会員の栽培技術及び経営能力向上に向けた活動支援を行った。また、本年から桃栽培者が増えたため、重点活動と連携し、桃栽培講習会・検討会を実施した。

■本年度の取組と成果

1 活動支援(勉強会等)

4月11日【りんご】

気象概要・凍霜害対策・防除暦・摘花剤の周知及び勉強会(会員9名)

4月11日【もも】

もも生理生態、栽培管理・病虫害基礎・防除暦の周知及び勉強会(会員6名)

6月3日【りんご】

梅雨時期の病虫害防除及びりんご「シナノリップ」の適期収穫勉強会(会員7名)

6月3日【もも】

もも仕上げ摘果及び園地巡回(会員6名)

7月17日【もも】

もも適期収穫勉強会(会員4名)

7月17日

経営勉強会及び意見交換会、講師：根田広域普及指導員(会員7名)

労務管理の基礎や経営継承の準備についてフロー図を用いて、自らの経営に当てはめ、振り返りをおこなった。

9月18日【もも】

もも秋季せん定勉強会(会員6名)

9月18日【りんご】

りんご施肥・養分欠乏勉強会(会員9名)

10月24日

農地の貸し借り勉強会(会員8名) 講師：農地中間管理機構山本参事、太田参事

11月13日【もも】

ももの土壌基礎と欠乏症の勉強会(会員3名)

11月13日【りんご】

りんご「ふじ」系統検討会(会員6名)

2月5日【もも】

もも若木の整枝せん定(会員6名)

2月5日【りんご】

りんごの薬剤及び整枝せん定(会員6名)

6～10月：会員2名の園地でハダニ類発生予察調査を毎週実施

りんご・ももの栽培技術など多岐にわたる内容であり、各会員の技術力向上、農作業安全の意識向上に繋がった。

また、自らの経営分析を行うきっかけ作りとなり、各会員の経営や方針を見直すきっかけとなった。



経営勉強会の様子

■今後の課題と対応

新規会員の参入や品目の増加など、多岐にわたる課題がでてきているため、会としての方針を定め、重点的に支援できるようにする必要がある。

会員のさらなる技術力・経営能力向上のため、今後も活動支援を継続する。

(伊藤)

大北産米の品質向上、需要に応じた米生産の推進

■背景とねらい

大北地域は米を主体とした水田地帯で、良質米の産地である。一等米比率が高く、食味・品質が安定しており、業務用米として評価が高い。しかし、今年は、6月以降の高温や温暖化による病害虫発生等で米の品質低下が懸念される年であった。JA大北等の関係機関で構成される「大北産米大量均質・一等米100プロジェクトチーム」が一丸となり、一等米比率98%以上を目標に活動を行った。

■本年度の取組と成果

1 大北産米の品質向上に向けた取組み

(1) 関係機関で連携した良質米生産に向けた基本技術の啓発及び指導

DVI（発育指数）による生育予測、成熟期予測データ等の情報提供、夏期の稲作現地指導会や籾摺り技術者講習会での、高温対策としての水管理の実施や病害虫防除の適期実施、雑草イネ対策、穂肥の施肥指導をJA等関係機関で連携して取り組んだ。

7月～8月には、JA大北と連携し、斑点米の主な加害害虫であるカメムシ類のフェロモントラップを管内28地点に設置、掬い取り調査を行い、発生消長を把握し、広域防除の時期を決定した。

8月の籾摺り調製技術者講習会では適期落水と適期収穫時期の情報提供、走り水による水田の乾燥防止、水分含量に応じた乾燥調製等について技術指導を行った。

関係機関と連携した良質米生産への啓発活動と生産者の弛まぬ努力により、北アルプス地域の一等米比率は94.8%となり、県平均を上回ることができた。

(2) 高温耐性新品種の現地適応性試験の実施

6月21日と8月26日には、南部地区と北部地区でそれぞれ試験的に栽培されている高温耐性新品種の現地試験ほ場の巡回を行った。従来品種との作期のずれや草型等の特性把握を行い、今後対応が必要となる温暖化に対応した稲作に向けた解決手段のひとつとして検討を行った。



左：ほ場巡回の様子 右：品種試験ほ場の様子

(3) 全量基肥体系の肥効調整試験の実施

近年、夏期高温の影響により全量基肥体系で使用されている緩効性窒素成分の早期溶出が懸念されている。そこで、JA大北と連携し、溶出時期を調整した新型肥料の現地適応性試験を管内で広く実施した。

品種や作型により、影響が異なる結果が得られ、収量や品質向上に向けては課題も見られたため、次年度以降も継続して検討していくこととなった。



松川村での肥料試験の様子

2 需要に応じた米生産振興への取組み

酒米の産地である大北地区では、県内の酒蔵との契約栽培も多く、高品質な酒米の生産が求められる地域である。管内では様々な品種が作付けされているが、酒蔵の要望に合う新しい品種の導入検討も行っている。

品種の現地適応性については、農業試験場と連携し、品質向上に向けた肥培管理についてJA大北と連携して生産者に技術支援を行った。9月には酒蔵や生産者も交えた検討会を開催し、品種の特性把握や今後の需要に合わせた酒米生産について検討を行った。

酒造好適性があり、作期分散を行える品種への期待の高さが伺えた。

■今後の課題と対応

1 高温に対応した玄米収量及び品質確保

品種によって影響は異なるが、夏期高温の影響により、登熟期以降の養分不足が原因と思われる玄米収量や品質低下が課題となっている。全量基肥体系に取り組むほ場であっても状況により、追肥の検討を行っていく。また、肥効調整を行った肥料の現地適応性については、継続して検討し、省力かつ効果的な肥培管理技術の確立をJA大北と連携して行う。

2 雑草イネの対策

発生エリアを特定し、農業機械による伝搬を防ぐとともに、除草剤・耕種的防除による防除指導をJA大北と連携し実施する。

(青木)

省力・低コストの新技术を活用した 稲作の推進

■背景とねらい

大規模稲作経営体への農地の集積が進み、生産コストや労力の低減、省力化が求められている。また、担い手にとってはさらなる面積拡大に向けては、育苗施設との兼合いや適期収穫の観点から、直播栽培を導入し、作期を分散させることが重要となる。管内では、令和5年から新規コーティング剤を活用した湛水直播栽培の取組み面積が増加したが、「コシヒカリ」では倒伏が問題となった。また、乾田直播栽培についても、生産者の関心が高まりつつある状況となっていた。

そこで、関係機関や直播栽培を先進的に取組んでいる松本地域と連携し、湛水直播栽培での倒伏対策による生産安定化と乾田直播栽培の現地適応性の検証に向けて試験を行った。

■本年度の取組と成果

1 直播栽培の生産安定化・新技术の検証

(1) 風さやかにおける新規コーティング剤を活用した湛水直播栽培の適応性検証

J A大北等の関係機関と連携して、今年度は「コシヒカリ」よりも耐倒伏性に優れた「風さやか」を品種として選定した。試験は池田町と大町市の2か所で実施した。

播種は4月下旬から5月中旬にかけて行われ、各地区ともに出芽は良好であった。栽培期間中にいもち病の発生は見られたが、倒伏は無く、坪刈り収量で11俵、全刈り収量でも10俵を超える結果となり、品質も移植栽培と比較して遜色ない結果となった。また、収穫時期も10月上旬以降が収穫適期と思われる様子が確認でき、作期分散が可能であることが確認できた。

今年度の試験によって、新規コーティング剤を活用した「風さやか」での栽培適応性が確認でき、管内の大規模生産者へ直播栽培の導入の参考になる情報を提供することができた。

表 「風さやか」の新規コーティング剤活用の湛水直播栽培試験ほ場における収量・品質調査結果（一部抜粋）

試験区	玄米重 (kg/10a)	整粒歩合 (%)	胴割 (%)	白未熟 (%)	蛋白 (%)	千粒重 (g)
大町	777	84.8	0.7	2.7	6.3	22.9
池田	737	86.3	0.8	1.2	6.3	22.0

(2) 乾田直播栽培の現地適応性検証

管内では、大規模生産者を中心に、乾田直

播栽培への関心も高まりつつある。県内でも事例が少なく、情報が少ない中ではあったが、J A大北や資材メーカー等の関係機関及び、先進的に取組まれている松本地域とも連携をしながら、現地適応性の検証を行った。

試験は大町市のほ場で実施した。播種は5月上旬に行われ、播種後の苗立ち率も良好であった。倒伏も見られず、収量は全刈り収量で9.5俵となった。しかし、雑草防除を3回、追肥を4回行う必要があった等、省力的な栽培体系の実現には課題も多いことが分かった。



乾田直播試験ほ場6月上旬の様子（大町市）

2 松本地域と連携した取組み

湛水直播栽培や乾田直播栽培は近隣の松本地域で先進的に取組む大規模経営体が多く見られ、情報交換を活発に行なった。

令和7年7月22日には、大町市と安曇野市で取組まれている湛水直播2ほ場、乾田直播2ほ場の巡回を行った。両地域から20名程の参加があり、生産者どうしの親睦も深めることができた。令和8年2月19日には巡回したほ場の成績検討を含め、合同で研修会を実施した。

両地域ともに水稻が盛んな地域であり、生産者が直面する課題も似ているため、今後も連携して課題解決に取り組んで行く。



合同研修会における乾田直播試験ほ場巡回の様子（大町市）

■今後の課題と対応

1 乾田直播の省力・低コスト化の検証

乾田直播栽培雑草防除体系及び、肥培管理において、省力及び低コスト化が課題となる。次年度も引き続き、関係機関や近隣地域とも連携をしながら課題解決に向けた検証を行っていく。

（青木）

水田農業の複合化の推進 (競争力のアップ)

■背景とねらい

主に大規模稲作経営体が栽培を担っている転作品目の麦・大豆・そばは、湿害や連作による地力低下、雑草・病害虫の発生等による減収が課題であり、生産性や品質の向上を図る必要がある。

■本年度の取組と成果

1 小麦の高位安定生産

(1) コムギなまぐさ黒穂病対策（大町市、松川村）

令和5年度に管内で広くコムギなまぐさ黒穂病が発生し、種子消毒等対策が取られたが、令和7年度も引き続き小麦連作ほ場で発生が確認された。これを受け、発生があったほ場は全て他品目へ転換されることとなったが、今後も種子消毒を継続して行うことや、排水対策、適期播種等基本的対策技術を徹底することを関係者間で共有し、生産者へ周知した。支援センターでは次年度以降も小麦作付けほ場の巡回調査を実施する。

(2) 連作ほ場における土壌の酸度矯正指導

小麦連作ほ場で生育不良株が多発したことを受け、土壌の酸性化が疑われたことから、延べ20ほ場で土壌pHを調査した。その結果、15ほ場で酸性（pH：4～5）に偏っており、概ね生産者の聞き取り状況と一致した。作付前の苦土石灰施用による酸度矯正を指導し、次年度に結果を確認する。

2 大豆の高位安定生産

(1) 「すずみのり」適期管理指導と病害虫雑草防除指導（大町市、池田町、松川村）

適期播種と播種時の排水・かん水対策指導、適期除草剤散布指導を実施した。栽培期間中は高温干ばつで推移したため、かん水を行えないほ場を中心に、盛夏期には干ばつによる葉の裏返りや生育抑制が確認された。また、防除指導を実施し、多くの経営体でカメムシ類を対象とした1回以上の殺虫剤散布が行われたが、高温等による影響から、吸汁性カメムシ類やマメシクイガによる子実被害が多発した。防除回数や防除適期については課題が残った。カメムシ類の吸実害や干ばつの影響を大きく受けたほ場

では、成熟期に株の青立ち症状が多発したため、ほ場内での被害調査や適期収穫指導により、収穫作業の後ろ倒し作業や刈り分け等対応が行われた。病害は、QoI 剤耐性ダイズ紫斑病菌の出現から、代替となる薬剤の実証ほの設置と薬剤散布試験、代替薬剤への切り替え指導を実施した。これらの活動により、代替薬剤の散布を実施したほ場では紫斑病の発生は非常に少なく抑えることができた。



写真 QoI 剤代替薬剤（殺菌剤）の実証ほにおけるドローンによる散布試験（池田町）

(2) 「すずみのり」の採種指導と各審査（大町市、池田町）

安定した大豆種子の確保に向け、採種ほ場の栽培管理指導やほ場審査を実施した。8月と10月に採種ほ場審査を実施し、9月には現地検討会を開催した。ほ場審査と収穫調整後の生産物審査を経て、雑草多発ほ場1ほ場を除き全て合格となった。



写真 大豆「すずみのり」採種ほ場でのほ場審査（池田町）

3 そばの高位安定生産

生産者巡回により夏そば・秋そばの排水対策や適期播種、収穫指導を実施した。小麦同様に生育の悪いほ場が散見されたことから、土壌 pH 調査を行った。こうした生育不良株が見られるほ場では土壌の酸性化が認められたため、酸度矯正指導を行った。その後、7月に苦土石灰を施用したほ場では生育の改善がみられた。聞き取り調査により、過去数年間苦土石灰の施用を行っていなかったことから、施用効果の持続性についても再度調査する予定である。

4 献穀アワに係る支援

(1) 献穀アワについて

献穀は、宮中行事である「新嘗祭（にいなめさい）」に供えるため、新穀（新しくとれた米や粟）を農家が天皇陛下に献納することで、明治25年から続く伝統的な行事である。五穀豊穰への感謝や農業の重要性を広く認識する役割も担っている。北アルプス管内からの献穀は、平成25年に「精粟」を献穀して以来、今回12年ぶりとなった。献穀者は長年農業に携わってこられ、地域活動や地域貢献に尽力されている大町市の生産者が選出され、献穀は10月22日に皇居において取り行われた。当日は献穀者が桐の箱に入った「精粟」5合を献納し、天皇陛下の御会釈を賜った。



写真 桐の献納箱(手前)と宮内庁からの伝達書(奥)

今回、支援センターでは、アワの栽培にあたり、栽培管理や乾燥脱穀調整作業について支援を行った。

(2) 生育概況等について

播種作業は6月20日に行われ、農家のこまめなかん水により順調に発芽し、気温が平年より高く推移したことからその後の生育も良好で、

8月下旬に出穂期となった。

出穂前に一部アブラムシの発生があり、発生した株の除去等の指導を行った。アワの主要害虫であるアワノメイガの被害は殆ど見られなかった。また、栽培は防鳥ネットを設置した雨よけハウスで行われたことから、鳥害や獣害の被害も一切みられなかった。

穂の結実は良く、10月1日に収穫作業が行われた。収穫した穂はネットに入れてハウス内で吊るして乾燥し、同月10日に脱穀作業を実施し「精粟」となった。その後、厳密な調製作業が行われ、献穀アワが完成した。献穀者も「粒ぞろいや色つやの良いきれいなアワができた」と栽培の手応えを感じていた。



写真 精粟作業

■今後の課題と対応

1 病虫害防除指導、難防除雑草対策指導

小麦は、赤かび病対策として開花期の防除指導の徹底、コムギなまぐさ黒穂病のほ場巡回や対策指導を実施する。大豆は、開花期以降の殺虫・殺菌剤の適期防除指導を行う。また、小麦や大豆連作ほ場における難防除雑草対策指導を実施する。雑草多発生ほ場では他品目への転換を推進する。小麦やそばの連作ほ場における土壌調査や酸度矯正指導と実施後の効果の確認を行う。
(清原)

果樹の振興

■背景とねらい

りんごは従来のわい化栽培が主である。産地としての一層の生産性の向上を図るため、優良な枝変わり系統や新品種への更新のほか、病害虫防除の徹底による安定生産が課題である。

ワイン用ぶどうは栽培面積が30haを超え、ワイナリーを開業する経営体も出てきた。原料の安定生産を図るため、栽培技術の向上、病害虫防除の徹底が課題となっている。

生食用ぶどうは現在、北アルプス地域での栽培面積は少ないが、今後の高収益作物の導入を図る観点から、徐々に面積や新規栽培者が増えているため、個別巡回を実施した。

■本年度の取り組みと成果

1 りんごの生産振興

(1) 生育状況の情報提供と適期管理指導

J A大北と連携し、生態調査や果実肥大等の調査を実施し、生産者への情報提供を行った。また、安定生産と収量向上のため、現地講習会（仕上げ摘果、収穫前管理、整枝せん定）を開催し、適期管理指導を行った。



りんご整枝せん定講習会の様子(大町市)

(2) 病害虫の適期防除

J A大北と連携して、リンゴ褐斑病の適期防除について資料により情報提供を行った。

なお、令和7年の褐斑病の発生は、園地により差があった。

大町市や松川村で行った主要害虫のフェロモントラップによる発生予察調査結果を5月～10月に週1回程度の間隔で関係者に情報提供し、適期防除につなげた。

(3) 新品種・優良枝変わり系統の導入推進

県オリジナル新品種である「シナノリップ」の導入推進を図るため、J A大北りんご生産部会報への資料提供や、8月19日の早生種出荷目揃え会の際に適期収穫について説明した。当地域は標高700m前後のため、「シナノリップ」の収穫期は県内でも遅く、早期出荷のメリットは薄い、「つがる」の前に出荷できることや品質の高さが評価され、期待の声も多く聞かれた。



りんご早生種出荷目揃え会の様子(大町市)

2 ワイン用ぶどうの生産振興及び生食用ぶどうの導入検討

(1) ワイン用ぶどう適期管理と適期収穫の支援

管内の重点生産者に対し、6月～1月にかけて園地巡回を計4回行い、生育状況や降雹の状況を把握し、事後対策につなげることができた。また、クロープナビを設置している2経営体について巡回による生育状況、成熟調査の支援を行った。

■今後の課題と対応

りんごは、病害虫の防除指導については引き続き実施する。また、優良品種・系統への更新を勧める。

ワイン用ぶどうの振興では、安定生産、品質確保のための栽培管理、病害虫防除の指導、適期収穫のための熟度調査などの支援を継続して実施する。

生食用ぶどうの産地化に向けて、J A大北と連携して、基礎知識・基礎技術の定着・向上を図る。

(伊藤)

野菜の振興

■背景とねらい

管内の経営耕地面積は、約8割を水田が占め、農業産出額のうち米が全体の約6割を占める「水稻に特化」した農業生産構造となっている。

近年、肥料や農薬等の資材の値上がりに伴い米の所得の減少が見込まれる中、所得向上のため水稻+ α として園芸作物の生産振興に取り組んでいる。各品目の生産上の課題解決を図り、単収向上・面積拡大を目指す。

■本年度の取組と成果

1 白ネギの振興

白ネギは北アルプス地域における野菜の重要品目である。JA大北の推進品目にも位置付けられており、関係機関で連携して生産振興を図っている。今後、作付面積がさらに拡大すると苗の確保が課題となることが予想される。そこで、令和5年度に普及技術として公表された10cmピッチのロングピッチチェーンポット®を用いた白ネギ栽培技術について、白馬村に現地実証ほを設置し、育苗コスト低減や育苗労力の省力性、収量性、収穫物の品質などを調査し北アルプス地域での導入の可能性を検討した。

ロングピッチチェーンポット®を用いることで育苗にかかる経費や労働力を削減することができた。また、収穫期に収量や品質の調査を行ったところ、従来のチェーンポット®を使った育苗方式と比較して遜色がない結果となった。次年度も引き続き検討を行う。



ロングピッチチェーンポット®に1穴あたり4粒は種した様子

2 加工業務用野菜（ジュース用トマト）の振興

近年は、極端な降水によるほ場の滞水とそれに伴う根腐れ等の生育不良株の発生があり、単収向上に繋がらなかった。そこで、湿害対策を目的とし昨年度から高畝式栽培（ベッドマイスター）を導入し、今年度も継続して実証を行った。定植後の滞水はほ場の一部で見られたが、その後は干ばつ傾向となったため、湿害の影響は少なかったものとみられる。今年度は畝立て時の土壌の条件が悪く、想定した高畝とならなかったことから、次年度再度検討を行う。

3 夏秋どりイチゴの振興

管内の就農後経験年数の浅い生産者を中心に巡回し、生育状況等を定期的に確認しながら、病害虫防除や「サマーリリカル」に適した栽培管理方法等の技術指導を行った。今年度は梅雨明けが早く、盛夏期の高温により成り疲れの影響が秋期まで長期化した。また、ハダニ類やアザミウマ類等の微小害虫の発生があり、早期防除を指導したが、適期に防除を行えなかった場合には被害が拡大した。複数の生産者で萎黄病の発生があり、株の除去や栽培終了後の土壌消毒等防除指導等対応を実施した。また、生産者から試験研究の実施状況や試験場の育苗管理方法について視察希望が出され、10月に県野菜花き試験場（塩尻市）の視察見学を実施した。



県野菜花き試験場の育苗ハウス視察

次年度も適期防除指導を継続するとともに、摘果等の栽培管理指導を重点的に行い、単価の高い秋期の収量向上を図る。

■今後の課題と対応

各品目の単収向上を図るとともに、作業の効率化、省力技術を継続的に検討し、労力軽減による収益性の向上と生産拡大を図る。

（清澤、清原）

花きの振興

■背景とねらい

北アルプス地域の花き主要品目であるシクラメン・トルコギキョウ・ヒマワリは、近年の高温や8月の多雨等により生産が不安定となっている。これに対応するためJA大北や生産部会等と連携し栽培技術指導を行った。また、花の消費拡大や花育を進めるため関係機関と連携し取り組んだ。

■本年度の取組と成果

1 栽培管理指導

シクラメンについて、大北鉢花生産組合のハウス巡回検討会を5月、7月、8月の計3回実施した。組合員の栽培ハウスを訪問し生育状況を確認するとともに、栽培管理技術や防除対策などを検討した。また、8月の巡回の際には各地で問題となっているオヒシバの防除対策について、除草剤試験の結果などを検討した。

ストックについて、栽培講習会や八重鑑別講習会、生産者ほ場巡回、出荷目揃会等を開催し、品質のさらなる向上と出荷量の確保に向けて取り組んだ。徐々に減少を続けている作付け面積の回復が課題となっている。



シクラメンほ場巡回検討の様子（松川村、5月）

■今後の課題と対応

近年、シクラメンやトルコギキョウは夏期の高温による生育への影響が大きく、これに対応した肥培管理の技術の改善を進める。

また、露地花きについては、新規生産者の確保に向けて、JA大北や生産者部会と連携した説明会等を開催する。（清澤）

畜産の振興

■背景とねらい

大北地域では畜産農家戸数は少ないが、S P F豚農場や酪農家の6次産業化など特色ある畜産業が展開されている。また、めん羊農家の新規参入や水稻農家による飼料用子実用とうもろこし生産の挑戦など新たな動きもあり、各畜産農家の飼養管理技術の向上や臭気対策、自給飼料生産に対して支援を行っている。

■本年度の取組と成果

1 子実用とうもろこしの栽培試験（大町市）

大町市の大規模稲作経営体V法人やJA大北、種苗会社3社、JA全農長野、県農政部農業技術課専門技術員、県畜産試験場と連携し、大豆連作ほ場において子実用とうもろこしの栽培支援、品種試験を行った。

過去2年間の栽培試験、調査の結果、播種後子実が黄熟期となるまでの日数（RM）が、110日タイプが当地区に適していることがわかったため、110日タイプ4品種の現地適応性試験を行った。

1月9日にV法人や関係機関が集まり検討会を開催した。令和8年は、北アルプス版栽培マニュアルに基づき、大豆との輪作で4haについて今回試験結果が良好であった3品種を栽培する予定である。



子実用とうもろこし成熟期調査（10月22日）

2 酪農家の飼養管理技術向上支援（松川村）

松川村のU牧場では、課題となっている自給飼料の生産・調整、飼料給与技術について支援を行った。

また松本家畜保険衛生所、JA中信畜産酪農営農センターと連携して、生乳生産における衛生管理、トレサビリティ等の記帳の確認を行った。

自給飼料生産では、耕種農家と連携し、大豆連作ほ場で帰化アサガオが問題となっているほ場でスーダングラスの栽培試験を実施し、高い抑草効果が確認できた。



ヘイスーダン生育調査

3 中山間地における畜産振興

小谷村では、牛の放牧を行わなくなった公共牧場（紙すき牧場）を活用し、めん羊の飼育がおこなわれている。舎飼い時の飼養管理について支援を行った。



舎飼い時のめん羊

■今後の課題と対応

自給飼料の増産や耕畜連携は、資材・飼料高騰の影響を大きく受ける畜産農家にとっては重要な課題である。今後も支援を継続していく。

近年、小谷村では、中山間地の耕作を行っていない水田地帯での放牧酪農、肉めん羊の飼育を新規開始した農業者及び放牧酪農の新規開始を希望者がおり、飼養管理や自給飼料生産等について支援を行う。

（岡部）

野生鳥獣害防止対策の推進

■背景とねらい

北アルプス地域における野生鳥獣害の被害額は、広域防護柵の設置、捕獲により、年々減少しているが、開口部等からの侵入され、被害が発生している。

■本年度の取組と成果

大北地区野生鳥獣被害対策チーム（構成：地域振興局林務課・支援センター）で、市町村と連携し支援活動を行った。

1 集落単位での被害対策の推進

野生鳥獣被害対策防止総合対策交付金を活用して、北アルプス及び東山部山麓に、侵入防止柵が設置されている。定期的な点検、管理が必要となるため支援活動を行った。

広域柵の内側を生息地としているハクビシン、タヌキ等の中型獣、広域柵の山側の農地のクマ対策は、簡易電気柵を設置する必要がある。

簡易電気柵の維持管理、点検支援を生産者からの要請に応じて実施した。



簡易電気柵の管理支援（大町市）

2 鳥害対策

南部の果樹地帯を中心に鳥類による被害が発生している。防鳥網等による物理的な侵入防止が有効であるが、設置が困難である。

そこで、松川村の農業者や地域住民約30名を対象に、研修会を開催した。農作物収穫後の残さの適正処理、集落の餌場をなくす取り組み等、環境管理面の重要性を理解していただいた。

■今後の課題と対応

広域防護柵の維持管理が不足していることが原因で被害が発生している事例がある。（岡部）

桜仙峡あずき保存会の取り組み

■背景とねらい

池田町の金の鈴農産物生産者組合は、陸郷地区で栽培が行われてきた在来あずき品種の栽培維持と特産化のために、平成27年12月に保存会を設立した。特産化に向けて、生産や品質の安定が求められている。

■本年度の取組と成果

1 安定生産に向けた技術支援

4月の役員会で栽培指針の検討を行ったが今年度は大きな変更はなかった。栽培指針は5月19日のキックオフミーティング時に会員に配付した。また、播種・定植前に栽培ほ場13か所の土壌診断を実施し、適切な施肥、土壌改良について指導した。

2 ほ場巡回指導

9月19日に会員の立ち会いの下、ほ場12カ所の巡回を行い、あずきの生育状況や管理状況を確認した。

ほ場巡回の状況は資料にまとめ、11月18日の目揃え会の際に説明し、今年度の振り返りに活用した。本年は病害や鳥獣害、降雹がみられた。安定した収量を確保するため、害虫対策や育苗の方法を提案した。



ほ場巡回の様子（池田町）

■今後の課題と対応

需要に供給が追いつかないことが課題であるため、既存生産者の生産拡大（収量増加）と安定生産に向けた提案を引き続き行う。

令和7年度の作柄が害虫や鳥獣害に加え、天候による影響が大きかったため、生産者と相談しながら気象の変動や栽培リスクに対応する方策の検討を行う。（伊藤）

「紅梅漬」梅生産の取り組み

■背景とねらい

「農村いきいきネットワーク池田」が、昔ながらの味の伝承として、池田町の土地で昔から伝わるパリパリの甘梅漬けの「紅梅漬」加工を通して、後継者の育成と組織の継承、地域の活性を図っている。その中で、原材料の梅（白加賀）を自らで生産する機運が高まり、令和4年から栽培支援を行っている。

■本年度の取組と成果

1 安定生産に向けた技術支援

5月に、適期収穫をするために、ほ場巡回を通し、会員と検討して収穫開始日を決定した。

1月23日に、会員名と梅整枝せん定講習会を開催し、本年の反省から来年に向けての栽培について意見交換や整枝せん定の方法を説明した。

令和4年まで、数年、栽培管理できていなかった梅園であったが、会員の熱心の管理で、みごとな園地となっている。



梅整枝せん定講習会の様子

■今後の課題と対応

需要に供給が追いつかないことが1つの課題であるため、安定生産に向けた提案を引き続き行う。

令和7年度の作柄は収量が予定通りであったため、生産者と相談しながら気象災害等による栽培リスクに対応する方策の検討を行う。

（伊藤）

雪中キャベツの取り組み

■背景とねらい

小谷村では「雪中キャベツ」の生産振興に力を入れているが、近年、育苗期間である7月～8月に前例の無いほどの高温が続き、苗の生育不良や定植後の欠株が多発している。温暖化は急速に進んでおり、今後も夏場の高温傾向が続く可能性は高い。

そこで、育苗期間を長くすることで、育苗期の高温を回避できること、苗が硬くなることで定植機や手植えでの作業性が高まること、また、定植適期も長くなるため、作業や天気の都合に柔軟に対応できるスーパーセル苗技術が現地で導入可能かを昨年に続き検討した。

■本年度の取組と成果

1 スーパーセル苗の試験概要

- (1) 品種：キャベツ「夢舞台」
- (2) 播種日
 - 6月25日：育苗期間56日
 - 6月30日：育苗期間51日
 - 7月3日：育苗期間48日
 - 7月20日：育苗期間30日（慣行）
- (3) 定植日：8月20日



スーパーセル苗定植状況（小谷村）

(4) 調査結果と考察

- ・育苗期間ごとの苗の生育状況には差異は認められなかった。
- ・定植後の生育状況や欠株率、収穫物も差異は認められなかった。
- ・スーパーセル苗は高温回避技術として、一定の効果があると認められた。

■今後の課題と対応

高温回避技術として、スーパーセル苗技術の向上を図るため、次年度も試験し検討する。

（高野）

クレソン生産の取り組み

■背景とねらい

中山間地域におけるクレソンの特産品化を目指して、これまで実証栽培を行ってきたが、水田全面を使用しない簡易栽培について生産者等から要望があり、水路用のポリエチレン管を活用した栽培試験を実施した。

■取組と成果

1 簡易栽培方法の検討

(1) 試験概要

栽培管理作業の軽労化を目的に、水路用のポリエチレン管を活用した栽培床を設置し、水路から引水した簡易的な栽培方法を検討した。

(2) 調査結果と考察

ポリエチレン管による栽培床の設置には手間がかかるが、水田での栽培とは異なり、その後の定植作業や収穫作業は労力負担が少なかった。

7月8日に定植し、8月8日の1か月後（収穫時期）の調査では、草丈で慣行区が16.9cmに対し、試験区は38.5cmで2.3倍長く、収量も100g/株以上が確保できた。



収穫期のクレソン

■今後の課題と対応

引き続き、簡易栽培について生産者と連携し、実証栽培を行っていく。

また、新規栽培者の確保・拡大や作業性の効率化に向けて、現地を会場とした説明会等を開催する。

さらに、地域内での消費拡大を目的に、直売所等と連携した販売方法の検討を行う。

（高野）

観光と連携した地元農産物の 利活用促進

■背景とねらい

国内外からの学習旅行の受け入れや都市部からの誘客を促進し、北アルプス地域内での農産物消費拡大等を図るために実施された誘客プロモーションの一環として、旅行事業者を対象としたおむすびづくり体験を開催した。

■本年度の取組と成果

おむすびづくり体験の実施

7月18日東京都中央区の銀座NAGANO 2階イベントスペースにおいておむすびづくり体験を開催した。

首都圏で国内・教育旅行やインバウンド旅行を取り扱う観光エージェント延べ22団体34名が参加し、松川村の安曇野ちひろ公園で提供している体験メニューの一つであるおむすびづくりを体験した。

松川村の水で炊き上げた松川村の美味しいお米に、松川村で栽培・加工されたきゅうりの佃煮・ふき味噌など9種類の中から自分の好きな具を思い思いに詰め込んだおむすびの味とその体験は格別であり、参加者の評判は上々だった。



おむすびづくり体験の様子

■今後の課題と対応

北アルプス地域の食・農業体験のすばらしさを認識してもらえるととてもよい機会となった。今後も旅行事業者のみに留まらず、地域内外のより多くの人にこのような経験を広めていきたい。(佐藤)

Ⅲ 調査研究活動結果

令和7年度調査研究課題実績書

北アルプス農業農村支援センター

課題名：子実用とうもろこし後作大豆栽培の検証（2年目）

要約：子実用とうもろこし後作大豆ほ場（以下、後作大豆）において、後作大豆2年目と1年目の比較を行った。土壤物理性調査では、2年目区が1年目区と比べ作土が深く気相率が高い傾向がみられ、前年と同様であった。土壤化学性調査では、子実用とうもろこし作付後に可給態窒素含量がやや増加し、大豆作付後に減少する傾向が見られた。両区の出芽本数は概ね同等であり、前年問題となった盛夏期以降の欠株や大型雑草の発生は少なく、前作終了後に残渣の細断を行った効果であると考えられた。また、両区とも周辺の大豆連作ほ場と比べ雑草発生量は少なく、子実用とうもろこし輪作の抑草効果は少なくとも2年目も継続すると考えられた。一方、マルバルコウへの効果は限定的であり、別に対策が必要であると考えられた。成熟期刈り取り調査では、2年目区で収量性に優れたが、1年目区では主に干ばつの影響を受け減収したものと考えられた。マメシクイガの子実被害は、1年目区で特に少なく輪作の効果が改めて確認できたが、適期防除の必要性が示された。これらの結果から、大豆2作・子実用とうもろこし1作の3年輪作体系の有効性が示された。

担当者：○主査 清原佑介、主査 岡部知恭、普及指導員 青木剛司

1 課題設定の背景と目的

大北地域は耕地面積の約80%が水田であり、主な転作作物として麦・大豆・そばの栽培が行われているが、転作ほ場の固定化による収量低下や雑草発生が問題となっている。令和5年度から新たな転作物目として子実用とうもろこしの実証試験を大豆連作ほ場において実施しており、令和6年度は後作大豆栽培における収量・品質や雑草発生への影響について検討した。今年度は後作大豆2年目区のほ場において継続調査を行うとともに、土壤理化学性の改善効果を検討し、管内の大豆連作ほ場における子実用とうもろこし導入の有効性について総合的に検証する。

2 調査研究の内容

- (1) 実施時期 令和7年4月～11月 (2) 実施地区 大町市常盤
- (3) 耕種概況 ア 供試品種 大豆「すずみのり」 イ 試験区 後作大豆2年目区、1年目区
ウ 耕種概要 ①試験区面積 2年目区：約60a、1年目区：約54a ②播種日及び播種量 6月30日、6kg/10a
③施肥 大豆専用一発肥料(N:P:K=8:25:9.9、30kg/10a)
④除草剤 土壌処理剤：エコトップP細粒剤F（播種同時散布）
茎葉処理剤：アタックショット乳剤（7月18日）、大豆バサグラン液剤、ポルトフロアブル（7月末、2年目区のみ）
⑤病虫害防除 播種前：クルーザーMAXX 種子塗布処理
8月20日：フセキフロアブル、トレボンエアー 無人航空機による散布
9月9日：レーバスフロアブル、トレボンエアー 無人航空機による散布
- (4) 調査研究方法 ア 輪作による生育、収量及び品質と土壤理化学性への影響
・調査項目 土壤物理性調査：作土深、貫入抵抗値、三相分布（作付前後）
土壤化学性調査：可給態窒素含量（作付前後）、硝酸態窒素含量（栽培期間中）
出芽本数調査（出芽前期）、成熟期刈り取り調査：生育、収量、品質、子実被害率等
イ 子実用とうもろこし導入が雑草発生に及ぼす影響
・調査項目 出芽後発生雑草種、風乾重（茎葉処理剤散布前、盛夏期）
- (5) 調査依頼先 (株)ヴァンペール平出
- (6) 協力機関 ア JA大北（肥料・農薬等資材の購入） イ 農業技術課専門技術員（区分1、調査協力、助言、情報提供）
ウ 野菜花き試験場 環境部、畑作部、農業試験場 環境部（区分1、土壤分析、調査協力、助言、情報提供）

3 結果の概要

(1) 輪作による土壤理化学性や生育及び収量への影響

ア 作付前土壤物理性調査

1,500 kPa以上をすき床（耕盤）層とみなすと、2年目区はすき層の出現が約24 cm深、1年目区は約22 cm深で、両ほ場とも下層は連続して硬く測定できなかった（図1）。この傾向は作付終了後も同様であり、両区ともに令和6年度から明確な変化はみられなかった（データ略）。

三相分布は作付前調査（4月21日）では、上層10cm、下層20cmともに、2年目区は、1年目区と比較し気相率が高く、固相率は低い傾向がみられた（データ略）。一方で、1年目区と子実用とうもろこし区（令和6年度大豆連作区）は同様の傾向であった。これらのことから、土壤物理性は両区で差がみられたが、ほ場間差が大きく、子実用とうもろこし導入による土壤物理性改善効果は今回の調査結果からは判然としなかった。

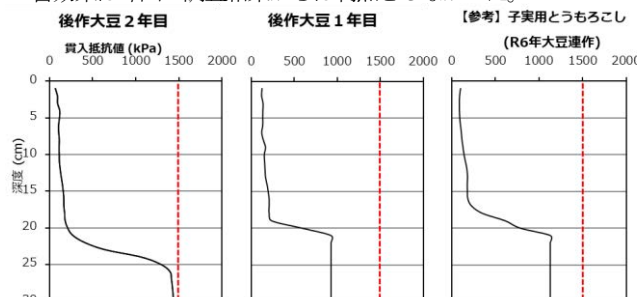


図1 作付前貫入抵抗値調査結果（4月21日調査）

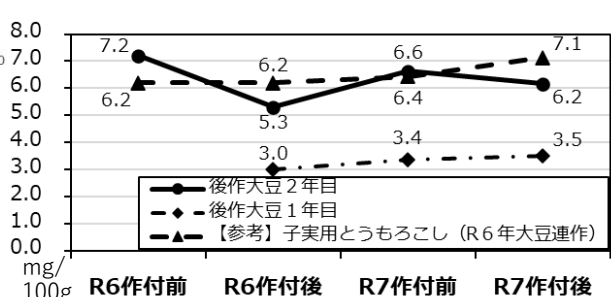


図2 可給態窒素含量の推移

イ 土壤化学性調査

可給態窒素含量はほ場間差が大きかった(図2)。いずれの区でも前作作付終了後から作付前にかけてやや増加した。2年目区では大豆作付後に減少した。また、栽培期間中の硝酸態窒素含量の推移は、生育前半は2年目区の方がやや高く推移したが、後半は両区に明確な差はみられなかった(データ略)。

ウ 播種後出芽本数調査

出芽前期の1mあたり出芽本数は2年目区で18.0本、1年目区で16.8本と概ね同等であった。また、両区ともに盛夏期以降も欠株や大型雑草の発生は少なかった。

エ 成熟期の生育及び収量調査

2年目区の方が、生育は旺盛で着莢数は多く収量は高かった(表1)。今回、1年目区では盛夏期に干ばつの影響を大きく受け、日中は葉の裏返りや株の萎れが確認された。子実品質(全糖、蛋白、脂肪)に明確な差はみられなかった(データ略)。

表1 子実用とうもろこし後作大豆 成熟期における生育、収量に及ぼす影響

試験区	生育調査				収量調査		
	主莖長 (cm)	主莖 節数	主莖 分枝数	主莖径 (mm)	着莢数 ²	子実重 ¹ (kg/10a)	百粒重 (g)
後作大豆 2年目	67.7	11.1	5.7	9.7	54.7	343.6	42.5
後作大豆 1年目	60.8	11.6	3.9	7.7	40.0	207.5	38.8

¹遠視で莖径の太い1本立ち株を対象とした。 ²脱穀後選粒前の重量。

オ 子実被害率調査

2年目区のマメシクイガ被害率が高くなり、正常粒率は1年目区より低くなった(図3)。子実用とうもろこし作付翌年に被害率が低下するのは、前年と同様の傾向であった。吸汁性カメムシ類による被害率に差は見られなかった。

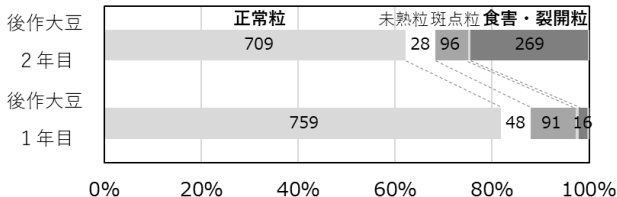


図3 子実被害率 調査結果 (※図中の数値は粒数)

(2) 子実用とうもろこし導入が雑草発生に及ぼす影響

両区ともに周辺の大豆連作ほ場と比べ雑草発生量は少なく、イネ科雑草やツユクサ、エノキグサの発生がみられなかった(表2)。

また、両区ともマルバルコウの発生があり、子実用とうもろこしほ場では、除草剤散布後も生育が確認された(データ略)。

表2 子実用とうもろこし作付が後作大豆ほ場の雑草発生に及ぼす影響

試験区	調査時期	メヒシバ		ヒエ類		ツユクサ		エノキグサ		アメリカセンダングサ		シロザ		アオビユ		マルバルコウ		その他	
		本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g	本数	風乾重g
後作大豆 ²	① 7/16茎葉処理剤散布前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0.8	0
	2年目 ② 8/14盛夏期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	8.2	0	0	0	0	0.07
後作大豆 ²	① 7/16茎葉処理剤散布前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0.01	0	0	0	36	5.2	0
	1年目 ② 8/14盛夏期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.02	0	0	0	6	2.1	0.43
【参考】 ¹	① 7/16茎葉処理剤散布後	512	51.0	0	0	40	3.3	0	0	8	0.3	0	0	0	0	0	36	1.5	0
	周辺連作ほ場 ② 8/14盛夏期	52	49.7	4	52.1	16	28.1	32	1.2	252	102.1	0	0	0	0	0	52	10.2	0

¹1区2反復で実施し、ほ場手前と対角線上奥の2か所を調査した。 ²別経営体の大豆連作ほ場。調査は無反復で実施し、雑草発生の中継な場所を対象とした。

4 考察

(1) 輪作による土壤理化学性改善効果

作付前の物理性調査では、2年目区で作土が深く気相率が高かった。これは前年と同様の傾向であり、両区の差はほ場間差によるものと考えられた。前年度実施した土壤断面調査では、耕盤層より深い位置に子実用とうもろこしの根が多数確認できたことから、排水性改善に寄与していることが考えられた。可給態窒素含量においてもほ場の差は大きく、過去に未熟有機物(豚糞、スラリー)が大量投入された影響が考えられた。2年間の可給態窒素含量の推移を見ると、子実用とうもろこし作付けにより増加し、大豆作付後には減少する傾向が確認できた。このことから、子実用とうもろこし導入は地力の増進に寄与することが考えられた。

(2) 子実用とうもろこし作付後の残渣対策

前年度は子実用とうもろこしの未熟残渣が影響し、欠株や栽培期間後半のアオビユ等大型雑草が発生した。このことは生産者自ら課題として認識しており、今年度は前作作付け後にフレールモアーによる細断が行われた。播種後の両区の出芽本数は概ね同等であり、欠株の発生や雑草抑制に繋がった。今年度も各ほ場で残渣すき込み作業が行われ、次年度はさらなる改善が期待できる。

(3) 後作大豆栽培のマメシクイガによる子実被害低減効果

マメシクイガによる子実被害率は1年目区で低く、2年目区では効果は持続しなかった。前年度はマメシクイガを対象とした防除が実施されなかったことから、2年目区では前年に個体数が増加したのと考えられる。また、今年度は防除適期より散布が遅れた(9月9日散布)ことも被害拡大に影響したのと考えられた。今回の結果から、子実被害をより一層低減させるには、輪作と適期防除(8月下旬)の組み合わせが必要であることが示された。

(4) 後作大豆栽培の雑草発生に及ぼす影響

両区ともイネ科雑草やツユクサ、エノキグサ等特定の雑草種の発生がなく、輪作による効果は少なくとも2年目も持続することが示された。上述のとおり今年度は欠株が少なく、栽培期間通して雑草発生は僅かであり、抜き取り作業に手間を要しなかった。また、メヒシバの発生が2年間見られなかったことから、生産者判断で2回目のイネ科雑草を対象とした除草剤散布を省略できた。一方、マルバルコウは両区ともに発生があり、子実用とうもろこしのほ場においても茎葉処理剤散布後に生存個体がみられたことから、輪作と現行の除草体系では帰化アサガオ類の防除対策は十分とは言えず、発生ほ場では別の対策が必要となる。

(5) 子実用とうもろこし導入の有効性について

子実用とうもろこしは単年度の収益性は低く、輪作体系における大豆栽培での増収や雑草抑制の達成により初めて導入効果が得られるものと言える。今回の2年間の検証では、これらの十分な効果を示すには至らなかったが、生産者の意識の向上やそれに伴う栽培上の対策が既に取られており、今回明らかになった課題解決に取り組むことで、今後さらなる収益向上が期待される。

5 情報提供方法

・大町市農業技術者連絡協議会 現地巡回(8月) ・大北地区水田作検討会で一部結果を報告(11月)

・JA、生産者、種苗メーカー等を交えた検討会で結果を報告(1月)

6 関連事業等

・水田農業経営確立推進指導事業 ・大町市農技連 農畜産物栽培技術モデル展示ほ設置事業

課題名：北部地域（白馬村・小谷村）における振興作物の調査・検討

要約：

白馬村・小谷村において、実際に栽培されている園芸作物の状況や今後の大面積の確保が見込まれる高収益作物の状況等を関係機関や農家に聞き取り調査した結果、白馬村は水稻育苗ハウス利用によるミニトマト栽培が1番多く、既存の施設利用による大規模経営体での取り組みも多く見られる。小谷村では生産組織のある特産物の取り組みが多いことがわかった。

また、今後の大面積の確保が必要な露地の高収益作物は取り組みが少なく、大規模経営体においても1法人以外は将来的に増やす見込みがないことがわかった。

担当者：職・氏名 課長 篠田秀明 専門幹兼担当係長 清澤靖仁 ○主査 高野正美
主任 伊藤瑛浩

1 課題設定の背景と目的

北アルプス北部地域は農業生産額の大部分を水稻が占める水田地帯で、近年、担い手農業者への農地集積が進み、水稻経営体が大規模化している。また、北部地域で進められている大規模区画ほ場整備事業の実施要件として、高収益作物の大面積導入も求められている。

そこで、白馬村・小谷村において、過去から取り組まれている園芸作物の状況を関係機関や農家に聞き取りを行い、実際に栽培されている園芸作物を把握し、今後の大面積の確保が見込まれる高収益作物の可能性を検討した。

2 調査研究の内容

(1) 実施時期 令和7年4月～令和7年12月

(2) 実施地区 白馬村・小谷村

(3) 調査研究方法

①方法：関係機関（役場・営農支援センター・JA）及び、個別経営体の聞き取り調査

②調査日：令和7年4月～令和7年12月

③調査場所：白馬村・小谷村の現地

④調査項目：水田への園芸品目導入状況 今後の園芸品目導入の見通し

(5) 調査依頼先

白馬村農政課・白馬村営農支援センター・白馬村農業委員会・白馬村個別経営体（10ha以上）7戸
小谷村観光地域振興課・JA大北小谷センター

(6) 協力機関

農業技術課専門技術員

3 結果の概要

(1) 水田への園芸作物導入状況

① 白馬村

野菜：ミニトマト、スイートコーン、キャベツ、アスパラガス、白ネギ、タマネギ、食用ホウズキなど、全13品目、面積 830a。

果樹：ブルーベリー、ヘーゼルナッツ、リンゴの3品目、面積 270a。

花き：リンドウの1品目、面積 20a 特用作物：ウドの1品目、面積 20a

園芸品目導入面積合計 1,140a、水田面積に対しての導入割合は 1.8%だった。

② 小谷村

野菜：雪中キャベツ、ニンニク、白ネギ、スイートコーン、サツマイモ、カボチャ、青トウガラシ、全7品目、面積 379a。

果樹：さるなし、やまぶどうの2品目、面積 86a。特用作物：ウドの1品目、100a。
園芸品目導入面積合計 565a、水田面積に対しての導入割合は 6.7%だった。

表1 水田への園芸作物導入状況

白馬村			小谷村			
単位：a			単位：a			
野菜	ミニトマト	160	野菜	雪中キャベツ	140	
	スイートコーン	140		ニンニク	100	
	キャベツ	110		白ネギ	60	
	アスパラガス	110		スイートコーン	40	
	白ネギ	80		サツマイモ	20	
	タマネギ	60		カボチャ	16	
	ホウズキ	60		青トウガラシ	3	
	ジャガイモ	30		計	379	
	落花生	20		果樹	さるなし	56
	ブロッコリー	20			やまぶどう	20
	ケール	20	計		86	
	イチゴ	10	特用作物	ウド	100	
	サツマイモ	10	合計		565	
	計	830	水田面積		8,460	
	果樹	ブルーベリー	180	園芸作物/水田面積		6.7%
ヘーゼルナッツ		50				
リンゴ		40				
計		270				
花き	リンドウ	20				
特用作物	ウド	20				
合計		1,140				
水田面積		62,500				
園芸作物/水田面積		1.8%				

(2) 白馬村個別経営体（10ha以上）7戸

- ・H農場：水田から畑地への転換 野菜 270a、また、ブルーベリー 160aを作付け
- ・M社：白ネギ 20a を新規で栽培、次年度は緑肥作物 3ha播種し、高収益作物を栽培する予定
- ・H社：キャベツ、ミニトマト、ナスなど 50a 次年度も同様の予定。
- ・S社：ミニトマト、サツマイモなど 20a、次年度も同様の予定。
- ・N社：ミニトマト 3a 次年度も同様の予定
- ・個人経営2名：園芸作物の導入予定なし。

4 検討内容

- (1) 水田への園芸作物導入状況から、白馬村は水稻育苗ハウス利用によるミニトマト栽培が1番多く、既存の施設利用による大規模経営体での取り組みも多く見られる。近年の夏場の高温傾向により南部地域では高温障害果が多発していることから、気候的にも適地と考えられる。小谷村では村の特産物である、雪中キャベツ、赤ニンニク、ウドなど、生産組合(生産組織)のある園芸品目の取り組みが多い。
- (2) 白馬村での基盤整備事業において、今後の大面積の確保が必要な高収益作物(スイートコーン、白ネギ、タマネギ)は、1法人で栽培の予定はされているものの、その他の法人は将来的に増やす見込みはないことがわかった。

5 情報提供方法

地域計画の随時見直しに係わる検討会等を利用して、情報提供を図る。

6 関連事業等 なし

IV 研修報告

高温条件下での水稲全量基肥体系への追肥時期及び効果と必要性の検討

北アルプス農業農村支援センター 青木剛司

1 背景と目的

水稲では、省力化を目的に緩効性窒素肥料が含まれた一発肥料を施用し、穂肥等の追肥を行わない栽培方法（以下、全量基肥体系）が普及している。

しかし、近年は主力品種の「コシヒカリ」において、夏期高温の影響により緩効性窒素成分が早期に溶出する等、登熟期における養分不足が原因と推測される細粒や白未熟粒の発生が見られている。また、省力性や良食味米確保の観点から全量基肥体系においては追肥を行わない指導が一般的に行われており、全量基肥体系へのさらなる追肥（以後、追肥）に係る県内の知見は少ない。令和6年産において、安曇野市豊科地区の砂壤土ほ場で全量基肥体系に追肥を行う試験が実施され、幼穂形成期以降に葉色が黄化するほ場においては追肥を窒素量換算で2 kg/10a 施用することで、粒張りが良好となり、収量が向上する結果が得られた。

そこで、全量基肥体系に追肥を実施する場合の効果的な施用時期及び効果とその必要性の有無を判断する目安について検証することを目的に調査を行った。

2 試験方法

- (1) 試験場所 安曇野市堀金 4171（面積 25a 標高 560m）、大町市常盤 9514（面積 18a 標高 660m）
- (2) 試験内容 出穂 10 日前または 5 日前に硫安（N:21%）を窒素換算量で 2 kg/10a を手散布にて施用。対照区は追肥無。
10 日前追肥施用日：堀金 7 月 23 日、大町 7 月 24 日（出穂期 8 月 1 日）
5 日前追肥施用日：堀金 7 月 28 日、大町 7 月 29 日（出穂期 8 月 2 日）
- (3) 区 制 1 区 5 m×5 m、堀金のみ波板設置（7 月 8 日）、大町は波板無。各区 2 反復。
- (4) 耕種概要
ア 品種及び育苗様式：「コシヒカリ」、箱育苗・稚苗
イ 施肥（堀金）：基肥は 5 月 14 日にあづみ水稲一発 SiLight（N:P₂O₅:K₂O=18%:7%:8%）、45kg/10a、を移植同時で側条施用。
（大町）：基肥は 5 月 14 日に New3 大北水稲一発 S80（N:P₂O₅:K₂O=19%:9%:8%）、45kg/10a、を移植同時で側条施用。
ウ 本田作業（堀金）：耕起 4 月 20 日、入水日 5 月 10 日、代掻き 5 月 10 日、移植 5 月 14 日
（大町）：耕起 4 月 28 日、入水日 5 月 10 日、代掻き 5 月 10 日、移植 5 月 14 日
- (5) 調査項目
ア 可給態窒素濃度（迅速評価法及び培養法）
イ 幼穂形成期、成熟期における生育調査
ウ 葉色調査（幼穂形成期から傾穂期までの目視による葉色板数値及び SPAD 値）
エ 幼穂形成期、成熟期における養分吸収量
オ 坪刈り収量・品質判定機による玄米品質・粒厚分布
カ 成熟期における節間長
キ 収量構成要素

3 結果及び考察

- (1) 玄米収量や品質への影響及び施用時期について
堀金・大町ともに追肥を行った区では、行わない区と比較して、玄米の粒厚で 2.1 mm 以上の割合が増加し、千粒重が大きくなったことで収量が増加した。また、玄米品質では、白未熟粒の割合が減少した（表 1、図 1）。追肥の施用時期で比較した場合、出穂 10 日前では玄米が大粒化したことによる増収度合いが大きかった。一方、5 日前では、白未熟粒の発生がより小さくなり、整粒歩合も高かった（表 1）。
堀金・大町ともに追肥を行ったことによって、出穂期から穂揃い期にかけて葉色が回復したため（葉色板で 4.0、SPAD 値で 35 程度）、収量と品質向上に繋がった可能性が高い。また、出穂 5 日前に追肥を行った区では、登熟期後半まで葉色が高い状態を維持しており、10 日前よりも品質向上に繋がった可能性が考えられる（図 3）。
- (2) 食味への影響について
堀金・大町ともに追肥を行った試験区では、蛋白質含有量で 7% を超えることはなかった（表 1）。追肥の施用時期を出穂 10 日前から 5 日前とすることで食味への悪影響は少ないと思われる。
- (3) 倒伏への影響について
幼穂形成期、成熟期における草丈（稈長）・穂長及び穂数に大きな差は見られなかった（表 2）。また、堀金と大町ともに成熟期における各節間長に大きな差は無かった。出穂 10 日前から 5 日前での追肥によって、下位節間が伸長する影響は少ないと思われる（図 2）。
- (4) 養分吸収量に着目した追肥の実施の判断について
堀金・大町ともに稲体の窒素吸収量は、幼穂形成期において差は見られず、成熟期においては追肥を実施した区の方が増加していた。また、出穂 5 日前に追肥を実施した区の方がより多くの窒素を吸収している傾向が見られた（図 3）。
このことは、出穂 10 日前～5 日前の時期に追肥を実施することによって稲体に窒素が吸収され、玄米収量の増加や品質向上に繋がる可能性が高いことを示唆している。しかし、堀金と大町で比べると追肥実施後の葉色推移は大きく異なっていた（次項記載）。

(5) 葉色の数値を参考にした追肥実施の判断について

堀金のは場においては、7月20日頃に葉色版で2.5、SPAD値で30程度となっており、畦からの目視で葉色が淡くなっている様子が確認された。一方大町では、同時期に葉色版で3.0、SPAD値で32程度となり、堀金より葉色は淡くなっていなかったが、追肥を行ったことにより、葉色が葉色版で4.5、SPAD値で40程度まで数値が高くなる様子が確認された(図4・5)。

近年のような夏期高温となる年には、全量基肥体系に追肥を行うことが、増収や玄米品質向上に有効な手段である可能性が高い。本試験のような砂壤土ほ場においては、出穂10日前の時期に葉色版3.0、SPAD値30という数値を目安として、これを下回る場合には、全量基肥体系であっても追肥を行う判断も必要ではないかと思われる。しかし、大町のは場で追肥後に葉色がやや高くなった事例もあるため、ほ場の肥培管理や土目、地力等も考慮する必要がある。全量基肥体系へ追肥を行う際には、事前に葉色を把握した上で判断することが重要であると考えられた。

表1 玄米の収量及び品質(品質はケット社製AN-920、倒伏程度は目視による)

		全重		玄米重		千粒重		整粒(%)	白未熟粒(%)	胴割粒(%)	蛋白(%)	評価値	倒伏程度
		(kg/10a)	(kg/10a)	対追肥無	(g)	対追肥無							
堀金	10日前	1811	837	109.8%	23.0	102.5%	79.6	2.0	1.4	6.7	71	微~少	
	5日前	1763	783	102.8%	22.9	101.9%	82.3	1.0	1.0	6.8	70	微~少	
	追肥無	1698	762	—	22.5	—	79.4	2.7	1.6	6.3	73	微~少	
大町	10日前	1861	773	106.6%	23.7	102.3%	83.3	1.7	0.2	6.5	73	微~少	
	5日前	1842	749	103.3%	23.5	101.4%	85.0	0.8	0.7	6.6	72	微~少	
	追肥無	1800	725	—	23.2	—	81.1	2.6	0.6	6.3	74	微~少	

表2 成熟期調査の結果

		幼穂形成期		成熟期		
		草丈(cm)	茎数(本/m ²)	稈長(cm)	穂長(cm)	穂数(本/m ²)
堀金	10日前	81.2	434.2	91.5	19.4	446.3
	5日前	73.7	430.8	89.6	19.5	437.9
	追肥無	72.0	435.0	90.0	19.5	452.9
大町	10日前	74.2	415.8	89.6	19.0	422.9
	5日前	73.7	420.0	90.1	18.8	429.6
	追肥無	72.0	432.5	88.2	18.6	436.7

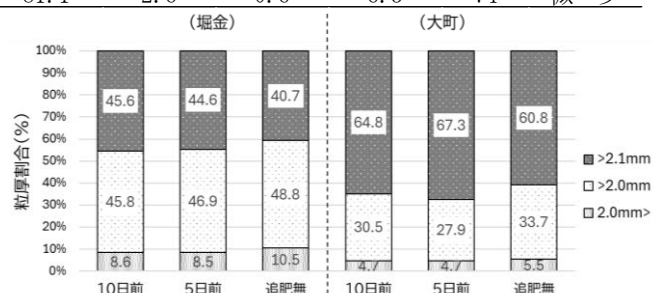


図1 玄米の粒厚分布

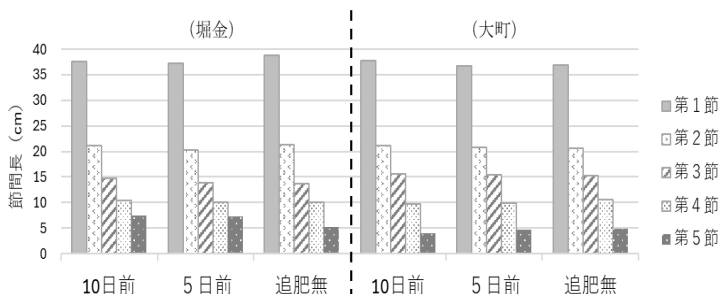


図2 成熟期における各節間長

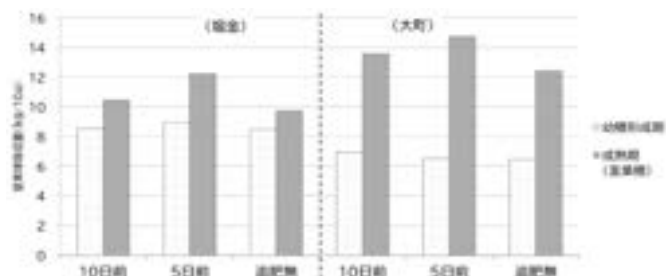


図3 稲体の窒素吸収量

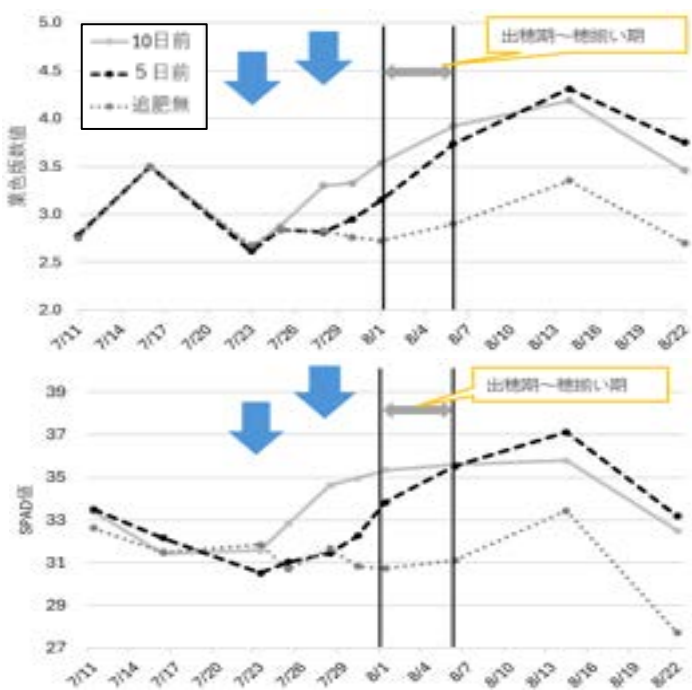


図4 幼穂形成期以降の葉色推移(堀金)

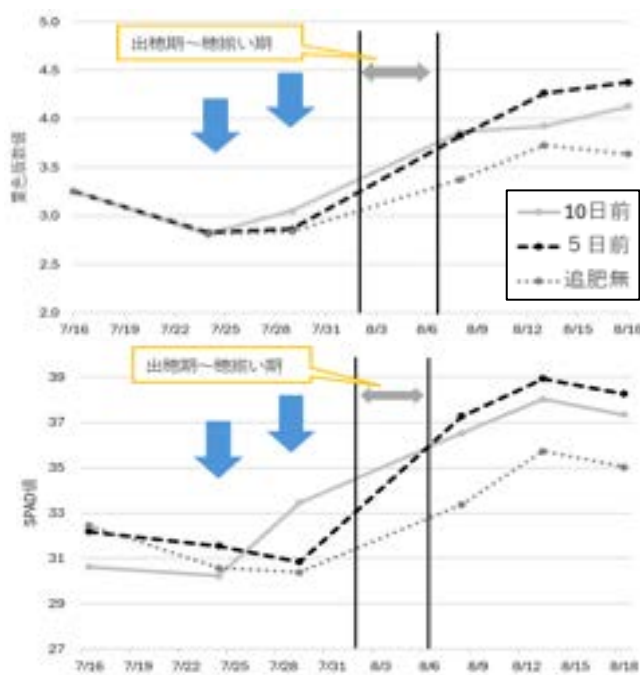


図5 幼穂形成期以降の葉色推移(大町)

V 参考資料

1 管内農業生産の状況

(1) 農家の概況

市町村名	総農家数 (戸)	販売農家数 (戸)	基幹的農業従事者数 (人)			認定農業者数 (人)		
			合計	男	女	総数	うち女性	うち法人
大町市	1,365	735	723	445	278	73	1	14
池田町	565	273	291	185	106	57	4	12
松川村	547	371	433	249	184	46	0	6
白馬村	438	167	158	98	60	42	3	7
小谷村	281	100	82	51	31	9	0	2
計	3,196	1,646	1,687	1,028	659	227	8	41

2020年農林業センサスによる。

認定農業者数は北アルプス地域振興局調べで2025年3月末日現在。

(2) 耕地面積

市町村名	経営耕地 面積(ha)	田 (ha)	畑 (ha)		1経営体 当たり 耕地面積(a)
			普通畑	樹園地	
大町市	1,857	1,556	271	30	244
池田町	772	700	50	22	270
松川村	989	909	41	39	448
白馬村	553	456	94	3	323
小谷村	115	97	18	0	103
計	4,286	3,718	474	94	

2020年農林業センサスによる。

(3) 大北地域農業産出額の推移

(単位：億円)

年	農業産出額	米	果樹	野菜	花き	畜産	菌茸	豆類 雑穀	その他
平成25年	96	48	4	7	3	8	24	0	2
平成26年	92	40	5	7	2	12	24	0	2
平成27年	90	42	5	6	3	11	22	0	1
平成28年	91	44	4	6	3	11	22	0	1
平成29年	92	46	4	5	2	11	21	1	1
平成30年	97	48	5	5	2	11	24	1	1
令和元年	101	50	5	6	2	10	25	1	1
令和2年	95	45	6	7	2	10	24	-	1
令和3年	88	42	5	7	2	10	20	-	1
令和4年	95	40	9	8	4	8	25	-	1
令和5年	100	43	10	9	3	8	26	-	1

長野県(北アルプス地域振興局)推定値による。

注：ラウンドのため農業産出計と内訳は一致しない場合がある。

注：令和2年度以降、「豆類 雑穀」は、「その他」に含まれる。

2 管内農業の担い手の動き

(1) 新規就農者（49歳以下）

（令和8年3月31日現在）（人）

市町村名	新規学卒就農		Uターン就農						新規参入者		合計		
			29歳以下		30～49歳		小計						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計		
大町市	1								1	1	2	1	3
池田町													
松川村			2				2		2		4		4
白馬村									1		1		1
小谷村									1		1		1
計	1		2				2		5	1	8	1	9

(2) 農業青年クラブ

（令和8年3月31日現在）（人）

団体名	25歳以下		26～30歳		31歳以上		合計			PALネット (県協) ながの 会員数
	男	女	男	女	男	女	男	女	計	
アルプスファーマーズクラブ (郡協)	1	0	1	1	31	1	33	2	35	3

(3) 農業士協会・農業経営者協会・農村生活マイスター協会への加入状況

（令和8年3月31日現在）（人）

市町村名 団体名	大町市	池田町	松川村	白馬村	小谷村	計
農業士協会北安曇支部	6 (県協5)	2 (県協2)	6 (県協6)	1 (県協1)	0	15 (県協14)
大北農業経営者協会	7 (県協5)	0	2 (県協1)	7 (県協4)	0	16 (県協10)
農村生活マイスター 協会北安曇支部	11	11	14	9	10	55

3 令和7年度水稻奨励品種決定試験ほ調査成績

現地名：大町市常盤（標高 620m）

1 一般経過の概要

(1) 気象及び生育の概要

【育苗】

播種は南部地域で4月15日頃が播種最盛期、北部地域では4月22日頃が播種最盛期となった。令和6年産種子は、登熟期が高温であった影響で休眠が深く、品種によって催芽に時間がかかる、出芽の揃いが悪い等の状況が確認された。

4月20日頃から4月末にかけて寒暖差が大きくなり、日中は被覆資材による焼けによる障害が心配となる一方で、夜間は0℃付近まで冷え込み、保温が必要な状況となる日が見られた。大町市アメダス観測地点（標高784m、以下大町市と記載）の4月22, 25, 27日の最高気温は23℃以上となったが、4月26, 27, 30日の最低気温は2℃未満であった。寒暖差が大きくなった影響で、苗立ち枯れ病の発生が平年よりも多く、日中が高温傾向であったことで靱枯れ細菌病の発生も平年より多くなった。

【田植え～初期生育】

畦塗り・耕起等の本田作業は南部地域では例年並みに行われたが、北部地域では、残雪の影響で作業開始が遅れた。田植えは南部地域では、4月下旬から始まり、連休明けがピークとなった。北部地域では、本田作業の遅れから5月下旬がピークとなった。

6月以降は高温かつ、小雨による多日照の影響で生育は平年よりも進み、DVIによる生育予測では、平年に比べて5～7日早く進んでいた。また、高温による地力窒素の早期溶出等の影響で草丈はやや長め、茎数は品種により昨年に比べてやや多い傾向であった。

【出穂～成熟期】

7月以降も気温が平年よりも3℃程度高い日が続き、出穂期は平年に比べて5日ほど早まった。8月お盆頃にまとまった降雨があった影響で枝梗いもち、穂首いもちの発生が散見された。高温の影響で収穫時期も早まり、美山錦は8月22日頃から、コシヒカリは9月1日頃から収穫が開始された。出穂後、平年より気温が高く晴天に恵まれたことで登熟は良好であり、収量は平年並み～やや多であるが、ほ場による収量差が大きい。また、登熟期の高温の影響で、白未熟粒の発生が多く見られた。刈り遅れとなったほ場では胴割れの発生が見られ、等級落ちの原因となった。

2 耕種概要

- (1) 育苗 育苗様式：箱育苗 苗種類：中苗 ビニールハウス育苗 播種時期：4月15日 播種量：100g/箱
- (2) 移植 期日：5月15日 栽植密度：条間33cm×15cm 20.2株/m² 植付け本数：3本/株
- (3) 施肥 堆肥：なし、前年度に稲わら半量裁断し、すき込み
基肥：あるぷす清流1号(14-22-11.3) 4kg/a
追肥：BBNK707(17-0-17) 2kg/a（1回目1.5kg、2回目0.5kg）
- (4) 病虫害防除 種子消毒：4月3日 テクト[®]C70アブル 200倍 24時間浸漬
病虫害防除：デジタルカブフラ[®]箱粒剤 5月14日 50g/箱
RCヘリコプター防除 ビームエイトEXゾル 0.8 $\frac{1}{10}$ l/10a 8月1日 その他：特になし
- (5) 雑草防除 5月7日：シヨキニー豆つぶ 250g/10a、5月14日：ベッカク豆つぶ 250g/10a、6月5日：レプラス1キログラム粒剤 1kg/10a
- (6) 水管理・中干し時期 6月30日～7月10日
- (7) 収穫 9月2日（あきたこまち）、9月5日（信交559号）、9月8日（信交563号、つきあかり、美山錦、山恵錦）
9月11日（コシヒカリ）、9月12日（にじのきらめき）
- (8) 乾燥 9月2日～10月1日
- (9) 脱穀・調製 脱穀10月1日、籾摺り 10月21日

3 調査成績

(1) 評価結果

供試系統	対照品種	評価	評価の理由
信交559号	あきたこまち	○△	出穂期は「あきたこまち」より8日遅く、成熟期は3日遅い。登熟は早く、短稈で草型良好。粒大や品質は「あきたこまち」並。「あきたこまち」よりも穂数が少なく、穂長が長く多収であるが、比較対照がネズミの被害により低収となり、継続検討が必要と思われる。
信交563号	あきたこまち (つきあかり)	△	出穂期は「あきたこまち」よりも4日遅く、成熟期は6日遅い。登熟・草型・収量・品質は「つきあかり」並。「あきたこまち」よりも穂数が多く、やや大粒で千粒重も重い。品質は同等。「あきたこまち」よりもやや多収であるが、比較対照がネズミの被害により低収となり、継続検討が必要と思われる。「つきあかり」と比較して優位点がない。
にじのきらめき	コシヒカリ	○	出穂期は「コシヒカリ」より1日遅い。成熟期は「コシヒカリ」より5日程度遅く、短稈で草型は良い。「コシヒカリ」よりも穂数が多いが、千粒重も大きく多収。「コシヒカリ」よりも白未熟粒が少なく、整粒歩合も高く品質良好。「コシヒカリ」と比べて有望。

◎(極有望)－◎○－○(有望)－○△－△(継続検討)－△×－×(打切り)

(2) 具体的データ

現地名:大町市常盤

番号	系統または品種名	幼穂 形成期 月日	出穂期 月日	成熟期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数		生育中の障害(0-5)				病害虫(0-5)			特記事項		
							株当 本	㎡当 本	倒伏	雀害	冷害		いもち病		紋枯		刈 刈	付
											程度	不稔 %	葉	穂				
標準1	コシヒカリ	7.4	8.1	9.11	88	19.3	17.8	360	1	0	0	0	0	1	1	0	0	
標準2	コシヒカリ	7.4	8.1	9.11	94	18.9	20.8	420	1	0	0	0	0	1	1	0	0	
標準平均	コシヒカリ	7.4	8.1	9.11	91	19.1	19.3	390	1	0	0	0	0	1	1	0	0	
比1	あきたこまち	6.30	7.21	9.2	85	19.0	19.3	390	0	0	0	0	1	1	1	0	0	ネズミによる食害あり
1	信交559号	7.2	7.29	9.5	77	19.7	17.6	356	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	信交563号	7.1	7.25	9.8	77	19.5	20.2	408	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
3	にじのきらめき	7.2	8.2	9.12	67	20.4	20.2	408	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
参1	つきあかり	7.1	7.25	9.8	81	18.9	14.0	283	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
参2	美山錦	7.3	7.23	9.8	101	20.8	16.1	325	2	0	0	0	1	1	1	0	0	
参3	山恵錦	7.5	7.26	9.8	86	19.0	19.0	384	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

番号	系統または品種名	全重 kg/a	わら重 kg/a	精粗重 kg/a	精粗 歩合 %	籾摺 歩合 %	玄米重			同左 標準比 %	屑米重 kg/a	千粒重 g	外観 品質 上上-下下	概評※	評価の概要
							A区 kg/a	B区 kg/a	平均 kg/a						
標準1	コシヒカリ	150.7	82.3	82.7	54.9	80.8	67.3	66.4	66.8		2.5	24.2	上下		
標準2	コシヒカリ	156.5	87.9	84.9	54.2	80.0	66.1	69.7	67.9		3.3	23.7	上下		
標準平均	コシヒカリ	153.6	85.1	83.8	54.6	80.4	66.7	68.0	67.4	100.0	2.9	24.0	上下		
比1	あきたこまち	127.2	54.4	65.3	51.3	80.1	48.2	56.4	52.3	77.7	1.2	24.3	上下		
1	信交559号	145.5	62.4	80.7	55.5	79.7	62.4	66.3	64.3	95.5	3.2	24.8	上中	○△	品質並・多収だが、対照品種食害あり。
2	信交563号	146.5	67.1	73.4	50.1	83.8	61.8	61.2	61.5	91.3	0.8	25.6	上下	△	登熟・収量・品質つきあかり並。対照品種食害あり。
3	にじのきらめき	160.7	82.6	91.4	56.9	82.9	76.8	74.7	75.8	112.5	1.3	26.5	上中	○	大粒・収量及び品質良好。
参1	つきあかり	144.5	53.6	80.1	55.4	83.4	68.4	65.2	66.8	99.2	1.4	25.7	上下		
参2	美山錦	143.2	59.3	81.3	56.8	82.2	68.4	65.2	66.8	99.2	4.1	25.3	上下		
参3	山恵錦	141.2	56.3	71.0	50.3	79.7	54.8	58.4	56.6	84.0	1.6	25.7	上下		

※評価は◎(極有望) - ○○(有望) - ○△(継続検討) - △× - ×

4 令和7年度各種表彰・共進会・コンクール入賞状況

表彰・共進会・コンクール名及び賞名	【市町村】団体名・氏名	概 要
農林水産祭 第58回うまいくだもの コンクール りんご(りんご三兄弟® 部門) 一般財団法人長野県果樹研究会長賞	【大町市】 (株)国光園	全県でりんご「秋映」を対象とするのは今回が初めてであり、県内各地から21点の出品数があった。 管内の生産者1戸が受賞した。
第42回 中信地区ジュース用トマト 多収穫共進会 多出荷の部 奨励賞 多収穫個人の部 奨励賞	【松川村】平林 義正 氏 【大町市】勝野 美保 氏	ジュース用トマトの栽培面積の拡大と品質向上により、中信産地の維持拡大を図るとともに、安全・安心なジュース用トマト原料の安定確保と生産農家の所得向上を図ることを目的とする。 多出荷の部及び多収穫個人の部で、出荷量及び単収などが評価された。
令和7年度新嘗祭献穀(精粟)	【大町市】 株式会社 ヴァンベール平出	献穀とは、宮中行事である「新嘗祭」に供えるための新穀(新しくとれた米や粟)を、農家が天候陛下に献納することで、明治25年から続く伝統的な行事である。五穀豊穡への感謝や農業の重要性を広く認識する役割も担っている。 献穀者は、長年農業に携わってこられ、地域貢献に尽力されているなどの経歴により選定された。 御会釈は、令和7年10月22日に皇居内にて行われた。

5 職員構成と業務分担

北アルプス農業農村支援センター技術経営普及課

職名	氏名	担当項目 担当市町村	担当業務
所長	菅澤 勉 (内線：2510)	総括	
副参事兼 技術経営普及課長	篠田 秀明 (内線：2520)	課運営管理 大町市(副)	普及活動の企画調整と進行管理 農村生活マイスター、農村女性、 北アルプス山麓ブランド
専門幹兼 担当係長	清澤 靖仁 (内線：2521)	野菜、花き、 土壌肥料	環境認証、GAP、生育情報、 知的財産、農薬相談員
主査 普及指導員	清原 佑介 (内線：2521)	作物（水稻除 く）、野菜(果 菜類)、病害虫 大町市（正）	農薬相談員(副)、農業経営士、 カイゼン
主査 普及指導員	高野 正美 (内線：2530)	担い手、 経営(副)、 特用作物 白馬村小谷村	重点活動課題（進行管理） 農業士、就農相談、農業研修生、 農ある暮らし
主査 普及指導員	岡部 知恭 (内線：2530)	作物（副）、 畜産、鳥獣害、 松川村	スマート農業（正）、農作業安全、 農作物災害（副）
主任 普及指導員	伊藤 瑛浩 (内線：2531)	果樹 池田町	重点活動課題（推進リーダー） 農作物災害（正）
技師 普及指導員	青木 剛司 (内線：2532)	作物（水稻） 経営（正）	青年農業者、情報、スマート農業(副) 農業経営者総合サポート事業、 集落営農、制度資金
主事	佐藤 久美 (内線：2532)	地産地消 食育	6次産業化、農村女性（副）、 北アルプス山麓ブランド推進